島本政一著

日本民族史　全

東洋タイムス社刊行

自序

◎吾人は我が國民性の研究及び我が民族の考察に對しては久しき以前より少なからず興味を有してゐた。

顧ふに各民族には夫々特色あり性癖のあることは今更贅言を要する迄でもなく我が『日本民族』も日本人個有の特色と性癖を有する者である。

その特色たるや、他民族に比し頗る神秘的にして最も深く研究に慣するものあることは既に先覺者の斷定を下すを見ても明かなる所である。

◎されば吾人の如き淺學菲才の徒が如斯き問題を單明するは頗る至難中の至難たるは言を要するまでもないが、吾人過去數年に於ける實際的研究と先覺者等の鞭韃により苦心研鑽且つ貧苦と戰ひ漸くにして本書を世に刋行するに至つたのである。

◎本書の內容は主として、史學人類學及び文學上より「日本民族」に關する觀察の結果を叙述したもので我が民族が如何なる種族なるか、如何にして日本人なる混合民族の成立したかを一般讀者に知らしむと共に此種の問題に關する學問上の趣味と參考にせられんが爲めに上梓したものである。幸ひに愛讀あらんことを望むや切。

◎序言を畢るに臨んで、本書刋行に際して原田潼郎氏の御好意を銘謝する。

大正十五年盛夏

大鐵沿線北田邊の寓居にて

著者識

日本民族史（目次）

附録

日本民族史　全

島本政一著

（一）緒言

日本國民として是非共有つて居らねばならぬ知識の中、最も必要なるものは、吾人の祖先に關する知識である、さり乍ら之を明かにするには、史學、人類學、人種學、言語學、考古學等、諸方面より研究の步を進めてからねばならぬ、とても淺學菲才なる吾人の企て及ぶ處で無い、されば吾人は此の如き範圍の廣い問題に對しては唯だ我々自身の與

味と注意とを惹くに足るものだけを研究するに留めて滿足し無ければならない、又た吾人の興味を感じない研究や、理解し難い研究までをも一々蒐集網羅して、それに綜合的に叙説批判するが如きは、吾人の好まざる所である、幾多の材料を渉獵配列して日本民族の起原由來を精確に論證するには他に適才も尠くない、吾人は唯だ今日まで咀嚼することの出來た處だけを在りの儘に紹述するに過ぎないのである。

（二）雜種民族としての日本人

日本民族は、其の言語、風俗、思想、生活等に於てこそ立派に統一せられた特殊の民族であるが、併し其の容貌、骨骼等の點に於ては實に多種多樣であつて、一定固有の類型と稱するに足るべき特殊の外形を抽出することは困難である、皮膚帶黃白色にして顔容細長く、鬚髯疎に

して稍々赤色を帶び、身體の構造風采凡て相配して高尙威嚴の容姿を具へてゐる者もあれば、軀幹輕小にして皮膚赫褐色を帶び、顴骨突出して鼻低く、唇厚く、鬚髯共に微なる者もあり、皮膚淺黑く、顏幅廣く、鬚髯濃密にして眼窩窪み、眉毛太く逆立せる者もあり、又た皮膚の色甚だ黑くして頭髮の著るしく捲縮せるやうな者もゐる等、日本人に少しも一定の人種特形徵なく、從つて其の祖先の複雜せることが明らかである。

此の如くに異種多樣なる日本民族の中、其の中心となり幹部となり治者となつて他の種族を統御同化し、以て傳說的に思想的に完全に融和せしめて强固なる國家を建設組織したるものは、所謂天孫民族である、天孫民族は一に大和民族と稱せらるゝ處の固有日本人であつて、優秀なる知能、有力なる武器を有せるが爲め、先住種族たる土蠻卽ち古史に所謂、蝦夷、土蜘蛛、熊襲、隼人等を征服して其の一部は之を

殺戮し、他の一部は之と同化融合して日本民族を統成した、要するに、日本民族は、天孫民族と種々なる先住民族との混血より成れる雜種民族である、猶ほ此他に、原史時代より有史時代に互りて朝鮮を經或は支那より直接に吾國に移住歸化せる漢民族も亦た尠く無いから、我が日本民族の血管内には漢人の血液も流れてゐる。

然らば先住民族の種別如何といふに、蝦夷が『アイヌ』人種であることだけは明白であるが、土蜘蛛、熊襲、隼人等の人種的本性に就ては學者間に種々の異論がある、這般の點に就ては後章條を逐ふに從つて仔細に論ずることにするが、吾人の觀る處を以てすれば、いづれも南方系の種族であつて、恐くは印度支那族、印度ネジアン族等であらうと想はれるのである(其の說明は後章に於て精述すべし)

今日に於てこそ僅に北海道の一隅に偏在せるに過ぎざる『アイヌ』種族も、有史以前に於ては北は奥羽より南は琉球に至る迄汎く日本

內に蔓布して殆ど到る所に遺物遺跡を留め、又た漢史に『倭人』と記るせる九州の種族卽ち海士、熊襲、肥人、隼人等は九州全土に亙りて棲住し、尙ほ進んで日本本島の沿岸及び內地に分布し、更に朝鮮にまで普及してゐた。而して此等の先住民族の中、天孫民族と同化融合せし者は早くより日本人中に其の跡を沒して、國史上に其の記錄を殘さゞるも、之に反して屢々抵抗を試み、或は同化せざりしものは、蝦夷、土蜘蛛、熊襲、隼人等と稱せられ、異民族として取り扱はれた。

吾國古來の小說戲曲を見ても、日本民族中にいろ〳〵の種族的區別の存することを暗示してゐる、智仁勇を兼ねたる大人物の容貌は、顏長くして鼻隆く、皮膚の色白くして眉目淸秀なる天孫民族型であるが、之に反して慓悍獰猛なる小人惡人は、眉毛逆立して鬚髯濃密なる『アイヌ』型の人物か或は鼻低く唇厚き亦ら顏の南方種族系の人物である、此の如く小說戲曲中の人物に於ても、優等種族なる天孫民

族系と、野蠻なる先住民族系との『タイプ』が瞭然あらはれて、其の容貌、性質、感情等に於て日本民族間に著るしい差異の存することを示してゐる。

太古時代に於て種々なる種族の混血より成れる日本民族は、其の頭蓋指示數や、身長の點に於ては略ぼ一定の平均數を有つてゐるが、其の容貌及び骨骼に於ては既に述べたるが如く、日本人に固有なる種族的特徴を發見することが出來ない、而して此の雜然たる種々の形貌を總括すると、顏長く鬚髯疎に、鼻梁高き天孫民族系、顏幅廣く眼窩凹みて鬚髯濃密なる『アイヌ』型、及び鼻低く唇厚く鬚髯に乏しい南方種族系の三者に分類することが出來る、此の如くに日本民族は今に至るも猶は各祖先の固有の形貌を存するのみならず、風俗慣習の點に於ても多少其の痕跡を留めてゐる（後章に詳述）

（三）『アイヌ』種族

（イ）名稱

吾國の先住民族たる『アイヌ』（或は『アイノ』）は國史に蝦夷（えびす）『えみじ』と稱せらるゝ蠻族である『アイヌ』といふ名は後世に至つて日本人の附したもので、元來彼等自身は『カイ』と稱し、又た自己の同族を『カイナ』と云つたのを、日本人が聞き違つて『アイノ』『アイヌ』と呼んだのである、日本人がそう云ふ樣に呼ぶ處から、遂に彼等自身も亦た『アイヌ』といふに至つたので元來の種族名は『カイ』である、支那人は樺太の『アイヌ』を『クイ』（苦兀、苦夷、庫頁）と稱するが、恐くは『カイ』の原名から起つた轉訛であらう、吾國史が彼等の名稱に蝦夷といへる漢字を當てがつ

たのは『カイ』の發音を其儘に書いたので、即ち蝦夷は『カイ』の借り字である、處が蝦と鰕との字の類似してゐるのと、又た太古より『えびす』『えみじ』といふ和語のあるがため、蝦夷を『えびす』『えみじ』と訓讀し、果ては彼等の鬚髯の長くして鰕に似てゐるから、此く書いたのであらうと云ふ樣な說も出でた。

『アイヌ』は和語にて『えびす』と稱せられてゐるが、併し元來『えびす』とは天孫民族が異人種を指したる賤稱であつて、漢語の夷と同義である、必ずしも單に『アイヌ』に限つた名稱で無い、黑川眞賴翁の說に依れば『えびす』といへる語は『えみじ』の轉訛であつて『えみじ』とは『忌み避け』又は『忌み惡む』を意味し野蠻蒙昧なる異種族に對する總稱と認むべきものであるから、單に『アイヌ』のみを指したもので無い『日本書紀』神武天皇の條下に『えみじを一人、もゝな人、人は云へども手向ひもせず』といへる

和歌は『えみじ』の强暴勇猛なること其一人が良民百人に當るといひ傳ふれども、皇軍に對しては敵せずといふ意味で『えみじ』其者の强勇なることを詠んだものである、併し此處の『えみじ』は『アイヌ』種族のみを指したのでは無く、當時大和國に汎く棲住せし別種の先住蠻族、所謂土蜘蛛のことをも云つたものらしい。

又た國史では『アイヌ』を一に佐伯と記してある『さへき』とは支那人の所謂鴃舌の意で、言語の解することは能はざるものを形容せし言である『常陸風土記』に『國巢俗語曰、都知久母、山之佐伯、野之佐伯とあつて、土蜘蛛と佐伯とを區別して書いてあるのを見ても、佐伯が『アイヌ』種族たることは明かである、而して『アイヌ』の中既に早く歸順して朝廷に仕へたものを佐伯部と稱した。

（ロ）蔓　布

北は千島の果てから南は琉球に至るまで『アイヌ』の遺物遺蹟の殆ど全國到る處に發見せらるゝ事實に徴すれば、彼等が先史時代以來日本全土に亙りて廣く蔓布せしことが明かである、『アイヌ』の遺蹟とは言ふ迄もなく、貝塚、竪穴であつて、其中には（アイヌ）特有の土器、所謂、縄紋土器或は貝塚土器といつて、主に唐草模樣の曲線を附しある土器が、種々の石器や、人骨と共に發見せらる、而て此等の遺物遺蹟は、關東、東國に甚だ多く、又た九州の南部にも尠く無い、之に反して畿内、中國には概して少く、北九州には全く無い。

處が『アイヌ』以外の他種族、所謂彌生式民族といつて、主に幾何學的線條を附しある素燒きの土器（此の土器は始めて東京本郷の彌生町の石器時代の遺蹟中より發見せられしが故に、彌生式土器の名あり、從つて之を使用せし種族を假りに彌生式民族といふ）を使用せる民族の遺物遺蹟は、關東、東北には少く、畿内、中國に多く、九州にも

亦た多く發見せらるゝ。
是に由て之を見れば、吾國の石器時代に於ては『アイヌ』種族と、彌生式種族との兩族が全國に亙りて棲住せしことの明白なると同時に、兩民族の地理的蔓布に著るしい相違のありしことをも推測し得らるゝ、而て彌生式民族の如何なるものなるかは、別に章を改めて論述するが、矢張り一種の先住民族である、鳥居龍藏氏の說に依れば、此の民族を以て固有日本人、卽ち石器時代の次より既に朝鮮を經由して亞細亞大陸より日本內地に移住し來りし民族（天孫民族と系統を同うせる先史時代の日本民族）なりとし、之に反して喜田貞吉氏は南方系の種族と推測せられてゐる、這般の議論に就ては後章に於て詳述するが、唯だ茲には單に一種の先住民族と記することのみに留めて置く。
これを要するに『アイヌ』以外に猶ほ彌生式民族と稱せらるゝ一

種の先住民族があつて、此の兩種族の遺物を異にし、且つ地理的蔓布に相違あるを見れば、其の種族、風習、生活狀態を異にせしことが明かである、但し兩種族の遺物が同時に同一の地中から發掘せらるゝこともも稀でないから、此の如き地方には兩民族の接觸衝突せしことを知り得られる、例ねば、近年、鳥居、濱田氏等によつて發掘せられし河内國府、又鳥居氏の發掘せし紀伊の鳴神地方等の如きが則ち之れである、又た近年、柴田、長谷部、山崎氏等の親しく調査せし越中氷見郡宇波村海岸の洞窟遺蹟の如きも、兩種民族の遺物が同時に發見せられた、但し此等の場合に於て『アイヌ』の遺物よりも彌生式民族の遺物の方が遙かに多いのに徵すれば『アイヌ』と彌生式民族との相接觸衝突して前者が壓倒せられ、他の地方に退却したか或は其の跡を沒したことが推知し得られる。

以上は先史時代に於ける話であるが、さて原史時代に入りて天孫系

の民族が海を航して吾國に來住し、優秀なる智力と精良なる武器とを以て先住民族を征討するに至つた當時は『アイヌ』は主に今の東山道東海道を占領し、又た北陸一面にも廣く蔓延してゐた、而て天孫系民族によつて先づ第一に征服せられ或は之と同化したのは、實に北陸一帶に棲住せる『アイヌ』であつた、古代の國史に北陸地方を『越』（こし）或は高志と書いてあるが、恐くは現在の千島アイヌの自ら稱して『くし』といへるのと同じ名稱であつて、『くし』が轉訛して『こし』と呼ばれたのかも知れない、一說には北海を越して來た人の住んでゐる地方だから『越』といふのだともあるが、これは何だか牽强附會の說らしく想はれる、神代史に、素盞嗚命が高志の八岐大蛇を退治し、又た其子の太國主命が、高志の國に赴きて沼河姬と婚し、又た越の八國を平らげたと記してあるのは、之を神話と見做しても、天孫系民族が北陸地方の『アイヌ』を征討し或は懷柔せ

し事實を暗示せるものと認めなければならぬ。

有史時代に入りても『アイヌ』は依然東國北陸に蔓布繁殖し、大和朝廷に對して頑强なる反抗を試みた、されば崇神天皇の朝に、四道將軍の一なる大彦命は北陸に遠征し、更に景行天皇の代に至ては日本武尊の東夷征討の壯擧となり、爾來屢々王師を發して不逞の『アイヌ』を征し、又た一面には之を懷柔撫順せられたる結果『アイヌ』は次第に北退して遂に奧羽に偏在するに至り、果ては北海道の偏遐に遁れて民族的獨立を失ふが如き運命に陷つた、さりながら『アイヌ』種族の中には夙に大和朝廷に歸順して皇化に浴し、日本民族と離婚して其の俗を改めた者も多いから、日本民族の血管内には『アイヌ』の血液も可なり多く流れてゐる、齊しく日本人と稱すれども、全身多毛にして濃密なる鬚髯を有し、眼窩窪みて顴骨高く、一種魁威ある容貌を具へてゐるものは『アイヌ』の血液の濃厚なるものと

認めなければならない。

（八）由來

『アイヌ』種族の人種學的位置に就ては、從來內外の諸學者間に種々の說があつて、少しも一致して居らない、それは何故かといふに、現在の人種中に『アイヌ』と同一なる者が無いので、比較的研究をなすことの出來ない爲めである、されば『アイヌ』の人種的位置に關する所說は、いづれも學者の臆測に過ぎず、或は『セミチック』なりと云ひ、或は『ネグリトリー』なりと說き、或は高加索種なりといひ或は蒙古化せる歐人なりと唱へてゐる、さり乍ら、吾人の茲に注意すべきは『アイヌ』の黥面文身の風習なることゝ及び太古時代に喰人の風ありしことである『アイヌ』の遺蹟たる貝塚中より發見せらるゝ人骨に於て、往々筋肉附着部の剝離し難き處に、人爲的削痕を留

め、而かも其の最も深く且つ骨質の挫碎することは甚しいことは、エドワード、モールスが夙に武藏國荏原郡大森村の貝塚より發掘せし骨片に就て記述せる處で、喰人の風ありしことは之に徴して明瞭であり、又た、バチェラの『アイヌ人及び其の民族的』傳說 Ainu and their〔三五〕中に記する處に依るも『アイヌ』の祖先は人肉を食する人種なりし故、自己の親族と雖、之を殺して生まにて其の肉を食したといふことである、而て黥面文身の俗に就ては、現在の『アイヌ』に於ても見る處であり、又た古史に於ても之に關する記事がある、例之ば『日本紀』に『東夷之中、有日高見國、其國人男女並推結文身云々と』ある。

上記の如く『アイヌ』に文身の風及び喰人の俗ありしことを考へると、南洋系の種族に類せる點もある、近年ニューギニア島に於て發見せられし石器時代の遺物、就中、土器には『アイヌ』の土器に一致

せるものがありといひ、鳥居氏の如きも之を認めて居られるやうである、私は人種學及び民俗學の知識に乏しいから、此點に於ては充分に意見を述ぶべき資格もないが、從來多くの學者の說くやうに、若し『アイヌ』が亞細亞大陸から南進して吾國に移入したるものとはどうしても考へられない、寧ろ南方方面なる太平洋諸島から北進して我國に來つたものでは無からうかと想ふ、仍て之に就て左に少しく卑見を述べてみやう。

抑々『アイヌ』の遺蹟遺物は、北は千島より南は琉球に至る迄、日本全地殆ど到る所に蔓布してゐるが、併し關東から奥羽にかけて最も多く存在する遺物埋沒の狀態を見るに、關東地方にては地下二三尺の深部にあれども、漸次東北に赴くに從つて淺くなり、北海道に行けば殆ど表面に露出するのが例である、若し果して『アイヌ』が亞細亞大陸より我國の北端に向つて入り込み、漸次南進して日本全土に

擴がつたものとせば、上記の事實とは反對に、北海道や奥羽の地方には其の遺物の深く埋沒し、關東に至れば淺層の地に在らねばならぬ筈である、然るに實際上、其の遺蹟が關東のよりも東北地方のが新しく、東北地方のよりも北海道のが新らしく、要するに南に古くして北に新しい形跡のあるのを見れば『アイヌ』は從來諸學者の考へしが如き北方方面なる亞細亞大陸から吾國に入り込みしものに非ずして寧ろ南方の方面より入り込んだものゝ樣に想はれる。

更に一歩を進めて考へてみると『アイヌ』の遺蹟遺物が關東より奥羽に亙りて最も多く發見せらるゝに反し、畿內山陽には少く、北九州には殆ど全く無く、山陽には『アイヌ』の遺蹟なきに非るも槪して微々たるものであり、畿內及び附近の紀伊には彌生式土器に混じて『アイヌ』式の土器の發見せらるゝに過ぎないのに、南九州及び琉球には可なり多くの遺物遺蹟が發見せられる、此の如き事實は

『アイヌ』の由來に就て、おぼろげながらも一定度までの暗示を與へるもので、且つ其の文身喰人の風ありしことを參考してみると、私は『アイヌ』種族の進入經路及び其の蔓布狀態に就て左の如き臆說を立てんと欲するものである。

想ふに『アイヌ』は南方の方面から海洋を航して吾國に進み來つたもので、其の最初の上陸地は恐くは琉球諸島、九州南部の地であつたであらう、沖繩群島に『アイヌ』の先住せし形跡のあることは夙に獨逸の學者デーテルラインの始めて唱へた處で、大島の住民中に顏面軀幹手指共に多毛を以て掩はれてゐるもの多きを見て『アイヌ』の血液の濃厚なることを斷言し、又たベルツも小倉師團で大島の兵士百五十人の體質を檢して同棲の說を述べた、其後鳥居氏は沖繩諸島に於ける貝塚の遺物を檢して『アイヌ』の住みしことを論じた、兎に角、琉球及び南九州に於て『アイヌ』の遺物遺蹟の獨立し

て發見せられ或は彌生式土器に混じて發見せられることは今や周知の事實である、然るに北部九州に於て殆どアイヌの遺物遺蹟の無いのを見れば、既に此地方には『アイヌ』に先ちて彌生式民族の棲住し、悉皆の地域を占領してゐたので『アイヌ』は此處に進入することを得ず、其の大部分は更に海路を經て北東に向ひ、其の途次、山陽畿內、紀伊等の諸地方に幾分かの上陸者を留め、當時殆ど無人の鄉なりし關東地方に到達し、始めて此處に安住の地を發見し、蕃殖するに至つたのであらう、而て九州南部に居殘つた『アイヌ』は同じ先住民族なる彌生式民族と共に棲住せしも、後者の方の勢力が强かつたので遂に之がために壓倒せられ、少しも發展することは能はずして自然に滅亡し或は他種族と同化するに至つたのであらう、又た近畿、山陽等に於て『アイヌ』の遺蹟の少いのも亦た之と同樣の原因に基づくものと思はれる。

國史上に記述せられたる『蝦夷』或は『東夷』の『アイヌ』であることは蓋し疑ひなき處である、然るに長谷部言人氏は現在北海道に住める『アイヌ』の身長と奥羽、就中岩手縣あたりの現住民の身長とを比較し『アイヌ』の身長は一般に低くして平均一五六、七仙迷なるも、岩手縣の壯丁の身長は高くして平均一六〇仙迷であるから、我が國史上、奥羽、就中岩手地方に多く居たらしき蝦夷は『アイヌ』ではあるまいと云ふ説を立てられた、併し私共は此の如き説に賛成することは出來ない、現在北海道の偏隅に住める『アイヌ』の身長が低いのは事實としても、併しそれは彼等の身體の退化せる一徴候であるかも知れない、即ち日本人より多大の壓迫をも受けて北海の隅まで遁げのび僅かに其の生命と種族とをつなぎとめてゐるに過ぎない現在の『アイヌ』の身長が低いのは、畢竟彼等の弱者劣敗者たる以外に、其の退化墮落せる結果と思へば何の不思議もない筈で

ある、況んや現在の『アイヌ』は決して純粋の『アイヌ』種族で無く、日本人及び他の人種の血液の混合せる雑種族であるから、古代奥羽地方に猖獗を極め、王師に對して頑強なる抵抗を試みし蝦夷を以て今日の『アイヌ』と同一の身長を有してゐたものゝ様に考へてはならぬ、私共の見る處を以てすれば、現在奥羽の住民、就中、岩手地方住民の身長の高いのは、古代に於て蝦夷を征討せんと奥羽に入り込んだ強健なる内地人の子孫であるが爲めかも知れない、勿論、奥羽の住民中に『アイヌ』の血液混合せる者の多いことは疑ひなき事實としても歴史上明かなるか如く、蝦夷征討の軍に從ひし勇武強健なる内地人が次第に蝦夷を驅逐して遂に之に代り、奥羽を占領して優秀強壯の子孫を殘せしことを思はゞ、今日岩手地方住民の身長の高いのも蓋し當然であらねばならぬ、されば長谷部氏が日本に現在の奥羽住民の身長が比較的に高いのを見て、史上に記せる蝦夷を『ア

イヌ』で無いと論定せられたのは、輕卒の論と評すべきである。
併し東北及び關東の住民に『アイヌ』の血液を混加せる者の多いことは少しも疑がない、古來東人或は東夷の名の下に東方諸國の住民が夙に勇武を以て世に聞え、禁衛の舍人に任ぜられ或は貴紳權門の護衛をつとめ、又た防人として九州海岸の防禦を命ぜられたことがあり、降つて平安朝時代の末葉近き頃より『東夷』の子孫たる武士が東國に興起し、遂に源頼朝に統率せられて武門政治を開くに至つた、此の如く東國人の勇武强健にして、鎌倉時代の俗諺にも『東八箇國の勢を以て日本國の勢に敵す』とまで稱へられたのは、畢竟頑强慓悍なる『アイヌ』種族の血液が太古時代より東國諸方の住民の血管中に流れてゐるがためである。

（三）『アイヌ』と日本民族

『アイヌ』種族は現今は北海道千島及び樺太南部に住し、人口大約一萬八千餘と算せられてゐる、其の體質は頭形は『長頭』Dolichocephalus で、身體は濃密なる毛を以て掩はれ、鬚髯多く、頭髮は少しく捲縮し、皮膚の色は黄色なれども稍暗黒色を帶び、眼は奥深く凹み、眉毛濃厚にして一見相連續せるが如くに見ゆる、有史以前に於ては日本全土に蔓布し、主として東國北陸地方に派く住んでゐた、されば日本の地名及び日本語の中には『アイヌ』語の混合遺存せるものも少く無い、例へば『ふじ』(富士)『のと』(半島の氣、能登は其一例』(とまり』(港)『ぽんね』(骨)『ゆ』(温泉)『ありき』(歩行)『うんま『(馬)『ゑも(芋)等の如き是れである、從つて又た彼等の神話傳説の中には日本の神話傳説中に混入せられたるものもある、例へば『日本記』の神代卷にある諸冊の男女二神が鶺鴒の尾を搖かすのを見て交媾の道を知つたと云ふが如き神話は『アイヌ』の傳説の日本化せるも

のである。

『アイヌ』は野蠻蒙昧の民族であつたが、勇猛慓悍にして大和朝廷に强烈なる抵抗を試み王師を苦しめたことは史上顯著なる事實である、併し彼等の一部分は夙に朝廷に歸服して忠勇なる兵士となり禁闕の守護に當つた、所謂佐伯部なるものが即ち之れである、彼等の剛勇なりしことは、聖武天皇の詔の中に『東人は額に矢は立つとも背には矢は立たじと云て君を一つ心に護るものぞ』とあるに徵しても解かる、降つて平安朝時代の末頃よりは『アイヌ』の后裔たる武士が東國に興りて、質實强固なる鎌倉政府を建設して七百年の武門政治の臺を開いた、吾等日本民族の血管内には『アイヌ』の血液が流れてゐる、往昔より關東東北の住民が精英勇武の兵士として世に聞ゑてゐるのも決して偶然でない。

（四）彌生式民族

（イ）特徵

日本の石器時代の遺蹟より發掘せらるゝ土器及び頭骨には明らかに二種の差異がある、即ち關東奧羽等の地方に於ける貝塚よりは種々雜多の曲線を彫れる土器と長頭の頭骨が發見せらるるが、此の土器は例謂貝塚土器或は繩紋土器と稱せられ『アイヌ』の使用せる土器と全く一致し、又た頭骨の長頭なる點に於ても『アイヌ』の頭骨と同樣であつて、即ち『アイヌ』の頭蓋指示數は平均七七、三である、されば關東奧羽諸地方に於ける石器時代の遺蹟に此等の土器及人骨を殘せし者の『アイヌ』たることは寸毫の疑ひも無い、之に反して關西、山陽、九州等に於ける石器時代の遺蹟よりは獨立的に或は上記の土器及び人骨と混じて別型の土器と人骨とが發見せられる、即

ち其の土器は幾何學的線條より成れる模樣を彫れるを特徴とせるもので、明治二十一年東京本鄕の彌生町にある遺蹟中に始めて發見せられたものである處から、彌生式土器といへる名附を附せられ今に至るまで此く呼ばれてゐる、而て此の土器に伴ふて往々短頭 Brachycephalus の頭骨が發掘せられる、其の頭蓋指示數は八十乃至八十一二である、されば此の如き土器及び頭骨を殘し置きたる民族が前記の『アイヌ』に非ることは明かであり、從つて全く別種の種族たることは疑ひなき處である、所謂彌生式民族とは其の固有の土器の始めて發見せられし場處の地名に從つて假りに命名せられた者である。

此の如く日本の石器時代に於ては『アイヌ』種族と彌生式種族とが廣く全國に亙りて棲住し、兩々相對して部落を形成してゐたことは、其の遺物遺蹟の分布狀態に徵しても明かである。

然らば彌生式民族なる者の本態は如何、これ實に人類學者考古學者及び史學者間に於ける多年の問題であつて今に至るも猶ほ明かなる解決を告げない。

(ロ)本　態

抑々彌生式民族の本態に關する學者の議論は之を二種に分つことが出來る、一は『固有日本人』或は『原始日本人』なりとの説で、之を主張するは鳥居、濱田の二氏である、其説に依れば彌生式土器は朝鮮滿州の石器時代の遺蹟より出づる土器に類似して居り、又た我國に於て后世に至る迄使用せられてゐた祭器、即ち土師部土器と系統的關係がある、又が之に伴ふて出づる處の頭骨は短頭型であつて、朝鮮滿蒙の民族の頭骨に類似してゐる故、彌生式民族なるものは古く石器時代の治より亞細亞大陸から朝鮮式は沿海州を經由して三々伍々日本島に移入し來りし『原始日本人』『固有日本人』であら

う云ふのである、之に反して他の説は、フイリツピン、ボルネヲ等の南洋方面に於ても彌生式土器に類似する土器の多く存在することや、又た先史時代より異民族たる「倭人」「熊襲」「隼人」の巢窟根據地と認むべき九州方面に彌生式土器の多く發見せらるゝ如き事實より觀て、彌生式民族を以て南方系の民族なりとする說で、喜田氏の主張する處である。

私は上記の兩說中いづれの方が果して眞に近きか否かを斷定するだけの知識もないが、併し茲に卑見を述べて置きたいのは、頭骨に關する說である、抑々彌生式土器に伴ふて往々發見せらるゝ頭骨が短頭型なるの故を以て、直ちに短頭型の民族たる滿蒙民族を擧げ、彌生式民族を之に歸するが如きは大に攻究の餘地があると思ふ、蓋し朝鮮蒙古系のツングース種族の短頭民族たることは素より明白なる處であるが、併し又た廣義に於ける南洋種族の中にも短頭型のもの

が多く、例へばポリネシア人の八十五、一サモア人の八十三、シャヴア人の八十四、六の頭蓋指示數を示すが如き事實がある、されば單に頭骨の短頭型なるの點より彌生式民族の本態を推定するならば、滿蒙の民族とも云へるし、或は南洋の種族とも云ひ得られて何れとも判然しないことになる、又た土器にしても、朝鮮滿州にも類似の者もあり、又たフイリッピン、ボルネヲ等の南洋方面にも類似のものが存する以上は、彌生式民族の本態を單に土器の上から推定することは出來ない、されば頭骨及び土器のみに依りて此の不明なる民族の何たるかを確定することは中々容易で無い、こゝに於てか史學上の事實を參考するの要が起つてくる。

漢史に依るに吾國の上古時代には九州及び其の東の地に黥面文身の風習を有せし「倭人」の棲住せしことは明かであり、又た我國史を見るに、海人、熊襲、隼人、肥人と稱せられしものが九州全土に亙りて

住み、異民族として取り扱はれたことが明かである、而て此等のものが、何章論述するが如く南方系の種族かることは殆ど疑ひなき處であり、又た土蜘蛛と稱せられたる土蠻も廣く全國に蔓布せしこと等をも考へれば所謂彌生式民族たるものは右の如き異種族ではあるまいかとも想はれる、仍りて私は彌生式民族の名の下に此等の異種族を包括して論じてみたいと思ふ。

（八）倭　人

上古時代には我が九州に『倭人』と稱せられたる異民族が多數の部落を作つて住んでゐた『倭人』とは元來支那人の命名したもので『魏志』の東夷傳中に詳記してある、之に依ると『倭人國』は百餘國に分れ、其中、三十國は支那に交通してゐた、而て『倭人』に關する記事の中、吾人の特に注意すべきものは其の風俗である、曰く

男子無大小、皆黥面文身、（中略）夏后少康之子、封於會稽斷髮文身以避蛟龍之害、今倭水人、好沈沒捕魚蛤、文身亦以厭大魚水禽、后稍以爲飾、諸國文身各異、或左或右、或大或小、尊卑有差（中略）男子皆以木緜招頭、婦人被服屈紛（中略）與儋耳朱崖同（中略）以朱丹塗其身體云々。

此樣に倭人は黥面文身をなし、又朱丹を其の身體に塗りて化粧するの風があつた、此の如き風習は決して固有日本人即ち天孫種族に認めざる處であるから、倭人の異種族たることは毫末の疑もない、而かも此の異種族の文身は上記の文にあるが如く、水中に入りて魚蛤を捕ふるの際、水中に住む蛟龍の害を防ぐのが其目的であるので、詰り一種の迷信から起つたのであるが、それが后になつて身体の裝飾に變じた、此樣なことも亦た決して天孫民族に無いことである、而て此の倭人の風が儋耳朱崖のそれと同じであるとの上記の文は特に吾

人の留意すべき點であると思ふ、蓋し儋耳朱崖とは則ち上古時代南方支那に於ける呉越の地であつて、卽ち漢民族とは全く異れる呉人越人の棲住地域である、而て呉人越人は元來印度支那種族であつて漢民族の文明を採用し一種の文化的王國を建設せしものである、而て上古時代に於て我九州島に住みし倭人なるものが呉越人種と其の風俗を同ふすとの漢史の記事に徵すれば、倭人中に呉人越人と同樣なる印度支那種族の存在せしことは明かである。

抑々印度支那族なる者は、南部亞細亞種族であつて、今日では福建、湖南、廣東、廣西、貴州、雲南、四川等に住んでゐる、上古時代にては呉人、越人楚人、閩人等と稱せられて漢民族より蠻人取扱ひを受けたものであ る、彼等は黥面文身の俗を有し、水上の生活に馴れたものであるが、倭人も亦た同樣の俗を有し、好んで水中に入つて魚蛤を捕へた、我國の古史に『海人』となる一種族は則ち倭人の一部で、其の能く海を航

し深き海底に沈みて眞珠を取りたりといへる事實は前記『魏志』の倭人に關する記事と符合してゐる。

さり乍ら齊しく倭人と稱せられし者の中には呉人越人と系統を同ふせる印度支那族もあればヌ、此他に印度ネジアン族もあつたであらう、殊に我が國史に於て、熊襲、隼人、肥人と記せらるゝ異種族に馬來系のものあることは疑ひなき處である、私の想像を以てするに『魏志』の著者の一樣に倭人と記るせし者には、少くとも二種の種族より成つてゐたものらしい、蓋し『魏志』の記事より推してみると、九州全島は、支那の后漢末から三國時代に至るの間、南北の二大國に分裂し、北部は『後漢書』及び『魏志』に記せる所謂女王國の所領となり、南部は所謂『狗奴國』の版圖となつてゐた、而て『狗奴國』は國史に記せる熊襲國であつて、其の版圖は大隅、薩摩及び日向の三國に亙つてゐたから、北部の女王國の領地が豐肥、筑前、筑後六國に跨つてゐたことは明かである、此の如くに九州全土が女王國と狗奴國と

の二國に分裂して相對峙したのを見ると、恐くは此の二國の種族はそれ〴〵別種族であつて、平素互ひに反目敵視してゐる處から遂に分裂を來たしたのではあるまいかと思はれる、斯く想像してみると倭人の單一なる種族に非ずして、少くとも二種の種族たることが推測し得られる。

抑々『魏志』に記せるが如く、倭人は水人であつて好んで水中に入り魚介を捕へたとすれば我が國の古史に見ゆる『海人』と一致せるもので、且つ海人の祖先は海神なりとの傳說もあるから、之を呉人越人の水上生活に馴れ、又た其の酋長の龍族たることを誇れる彼國の傳說に對照すれば、少くとも我國の古史に見ゆる九州の海人が南亞細亞種族たる印度支那族に出でしことは之を想像するに難くない、之に反して倭人の一部たる熊襲、隼人等に關する國史の記事を味ふてみると、此等の異種族は寧ろ南洋方面より移入せし印度ネジア

ン種族らしい（此の考説に就ては后章に說明する）

史學の方面から私の想像する處を約言すれば、倭人は少くとも二種の別種族より成り、一は北九州を版圖とせし女王國に屬せし種族でこれは彼の呉人越人と其の種を同ふする印度支那族であらう、他は南九州を領域とせし狗奴國に屬せし種族、卽ち國史に記せる熊襲であつて（其中には隼人、肥人も含まる）これは印度ネジアン族であらう、併し此の外に他の種族の混合してゐたかも知らぬ。

思ふに印度支那族は南方支那の方面より支那の東南海岸を沿ふて北進し、直ちに海を航して九州に移り或は朝鮮を經由して九州に移つたものであらう、之に反して印度ネジアン族は南洋方面より九州の南部たる薩摩大隅に入りて移住したものらしく思はれる、而て此の兩種族共に黥面文身の俗があり、又其他の風俗に於ても相類似せる處があるので『魏志』の著者は之を齊しく同一の種族と認めて

綜稱的に『倭人』といふ單一の名稱を與へたのであらう、而て主に九州の北部に蕃殖せる印度支那族と南九州に蕃殖せる印度ネジアン族とは相反目敵視せるの結果として、遂に『女王國』と『狗奴國』との二國に分裂するに至つたらしい。

併し九州南部には有史以前より上記の印度ネジアン族の外に『アイヌ』種族も住んでゐたことは、日向、大隅、薩摩の諸地方に於て、彌生式土器以外に『アイヌ』式の遺物と認むべき繩紋土器の發見せらるゝを見ても分かる、現に今日に於ても南九州人の中には鬚髯の濃密にして『アイヌ』の血液を混ずること明かなる人が尠く無い、併し『アイヌ』種族は有史以前に於て彌生式種族たる印度ネジアン族、即ち國史上に記載せらるゝ熊襲、隼人の祖先のために夙に壓倒せられたものと見えて、其の記錄を史上に殘して居らない、想ふに九州に於ける『アイヌ』種族は印度ネジアン族のために驅逐せられ或

は之と融合混血して其の影を沒したのであらう、私の想像する處を以てすれば、前に既に述べしが如く、アイヌ種族も南洋方面から渡來したものであつて、其の最初の上陸地は南九州であつたが、之と前后して、此地には彌生式民族の一たる印度ネジアン族の繁殖してゐたが爲めに、思ふやうに移住發展すること能はず、又北九州には印度支那族の此地域を領有して居りしが爲め、九州には永遠の移住地を發見する機會なく、其の一部分のみを九州南部に殘し、他の大部分は更に海を航して北進し、當時無人の鄕なりし東國北陸の地に移住するに至つたのであらうと思はれる、而て九州南部に殘留せし一部の『アイヌ』族は、同じ先住民族たる印度ネジアンより征服せられ或は之と混血融合して了つたのであらう。

是を要するに、上古時代に於て九州全島を占領せし『倭人』の祖先たる先住民族は決して單一なるもので無く、印度支那族、印度ネジア

ン、及び之と融合せる『アイヌ』族の三者より成立せしものであらう。

(五) 倭人の分類

『魏志』『后漢書』に記載せる九州の異民族『倭人』をば我が國史上の記事に就て分類してみると『海士』(白水郎)『熊襲』『隼人』『肥人』となる、是等の種族に關して逐一左に述べてみやう。

(イ) 海人

『魏志』に『末廬國、有四千餘戸、濱山海居、草木茂生、行不見前人、好捕魚鰒、水無淺深、皆沈沒取之』とある、これは國史に見ゆる『海人』のことで『末盧國』と云ふのは即ち肥前松浦郡を指したものである魚鰒を捕へ、水の深淺となく沈沒して之を捕ふとある記事に依れば

此の地方に住める異民族の明らかに海人たることが判かる、而て此の種族が普通の日本人と異つてゐる隼人に類似してゐたと云へる『肥前風土記』の異事や、又た海人の長たる阿曇連濱子の黥面云々の記事に徴すれば海人の異種族たることは少しも疑がない、殊に彼等の巣窟とおぼしき肥前松浦郡が有史以后に於て大陸との交通點となり、遣唐使の船が多く此の地より出發し、又た支那から來航する船舶も此の地に到着したことを參考すれば、海人は支那大陸方面より移り來りし異種族たることが想像せられる、思ふに國史に海人が隼人に似てゐるとの記事のあるのは、恐くは黥面文身の風を同ふしてゐるからであらう、而て太古の支那大陸に於ける種族の中、黥面文身の風があり且つ水上生活に馴れた者は印度支那族たる吳人越人であるから、海人の印度支那族たるべきことは之を想定するに難くない、而て此の海人と同一の種族は啻に肥前のみならず、北九州地方

には廣く分布してゐたらしい、それは矢張り『魏志』に『女王國』の民俗を記して『好沈沒捕魚蛤』といひ『男子無大小皆黥面文身』とあるからで、女王國は既に前述せしが如く、北九州の大部分を版圖としてゐたから、是等の地域に於ても海人と其の種族を同ふせる異種族の分布してゐたことが判かる。

(ロ) 熊襲、隼人

熊襲の語義に就ては古來國學者史學者間に種々の說もあるが、私等は異種族の巢窟たりし土地の地名から起つた名であらうと信ずる蓋し『アイヌ』の北陸地方に住みしものを『越の人』と呼びしが如く、異種族を稱するに其古居地の地名を以てする類例のあるからで、之を『肥前風土記』『肥后風土記』等に徵するに、熊襲と記せずして『球磨贈唹』と書してある、球磨は肥后にあり、贈唹は大隅にある

地名である、是等の地に住める異種族を球磨人、囎唹人と呼んだのを合稱して『くまそ』と云ひ、それに熊襲といふ宛字をあつるに至つたのではあるまい歟、或は此の異種族の勇猛なる處から、わざと熊といふ動物名を割り當てたのかも知れない、本居宣長の『古事記傳』に熊とは其國人の勇猛なるを云ひ、襲とは勇男の約りたるにて『さを』の約は『そ』となるなりと述べてあるが、何だか牽强附會に近き感がある。

語義の詮索は姑らく措き、熊襲なる異種族は、之を國史に就て見るに唯だ其の勇悍强猛にして屢々朝廷に抗し、遂に征服せられたといふことが分かるのみで、其の人種學的位置に至りては、少しも明瞭でなく、單に傳說上に於ける異族に過ぎないのである、併し熊襲の征服せられたる后、其の歸順せる者をば豫ねて朝廷の順民となれる隼人即ち治平の隼人の酋長の治下たらしめ、而て此の酋長が大隅の囎唹郡

に在りて曾君といつたと云ふ國史の記事あるに徵すれば、熊襲と隼人とは同一の種族なることが想定し得られる、思ふに肥后の球磨と大隅の贈唹とに住める隼人種族が特に『くまそ』と稱せられたものかも知れない、熊襲も隼人も共に南九州を占據とし、大隅薩摩、日向肥后に分布してゐた者である。

隼人の名も元來は住地の名に出でたものらしい『唐書』の倭國傳に『有邪古、波邪、多尼三小王』とある、共に國を指したもので、邪古國波邪國、多尼國と呼べる國があつた、その中の波邪國人が國史の『はや人』即ち隼人であるかの樣に想はれる、併し此の波邪國のいづれの地方なるかは勿論明かで無いが、古來異種族に附せし名稱が其住居せる地方の名稱に據つたことは明瞭なる事實である故、隼人の名稱の起源も其の地名に因することは疑が無い、然るに本居宣長が隼人の語義を解して、大隅薩摩二國の人は敏捷勇猛なるが故に此の名

あり、古言に猛勇を『はやし』とも『とし』とも云へば『はや』と云ふに猛勇の意もある隼字を書くことは、走きこと此の鳥の如く『はやぶさ』てふ名も合へればなりと云つたのは、是れ亦た牽强附會に近き說明としか思はれない、語義の解釋は先づ兎も角として、隼人は熊襲に關する國史の記事に比すれば、其の習俗が明瞭であつて日本國有の民族と全く異れる外來種族たることを證するに何等の困難も無い。

『日本紀』神代卷に、火蘭降命と彥火火出見尊との相爭ひて、前者か后者に降りしことを記るせる條下に於て『於是、兄著犢鼻、以赭塗面告其弟曰、吾汚身如此、永爲汝俳優者』といふ記事がある、即ち火蘭降命は裸體になり犢鼻をつけ、赤土を面に塗つて汝の俳優とならんと彥火火出見尊に向つて言つたのである、處が犢鼻をつけ、赭土を面に塗るといふやうな風習は決して天孫民族に無いことである、元來犢

鼻は南洋土人の風俗の一であつて、ボルネオあたりの蠻族には此の風がある、又た顔に赤土を塗つて化粧をするが如きことも決して日本固有の風習では無い、而て火蘭降命は即ち隼人の祖先であるから隼人の人種的地位は略ぼ想像し得られる、國史には火蘭降命と彦火火出耳尊との二人を兄弟とし共に天孫種族になつてゐるけれどもこれは隼人の祖先をも天孫種族に歸して兩者を同化せしめんとしたる傳説に基づくのである、それから又た隼人に黥面の風ありしことは、之と同種族と認むべき『久米部』に於て此の風習ありしことに依て推測し得られる（『古事記』に大久米命の黥面のことが記してある） 尚ほ隼人が天孫民族と言語を異にせしことは、隼人の語を解する邦人が大隅薩摩の國造となつたといふ史上の記事に徴して明かである、其他、隼人の風習として、赤白土を以て彩色せる楯を持ち横刀を帶び、木槍を執つて胡牀に坐し、又た舞踏を好み、竹細工を能く

した。

是等の事實を綜合しても、隼人の異民族たることは明かである、彼等は薩隅に據りて屢々朝廷に反抗したこともあり、又た夙に朝廷に歸服して忠實なる兵士となり、宮闕護衛の任に當つた者もある、所謂久米部といふのが是れである、蓋し上古時代より奈良朝時代にかけて天皇の親兵として武勇を現はしたものは實に歸順せる『アイヌ』即ち佐伯部と此の久米部とであつた、兩種族共に勇悍を以て世に鳴つたものである、我が武士道の起源は實に異民族たる『アイヌ』及び隼人の出身なる兵士から始まつた。

然らば隼人の人種的本性は如何といふに、恐くは南洋方面より移り來りし印度ネジアン族でらう、抑々隼人には前記の如く黥面の風を有し、犢鼻を用ひし俗あるの他に、一種異様の武器を有し且つ好んで舞踏するの風がある、ことに吾人の注意すべきは、彼等の使用せし

楯で『延喜式』に依るに、其の楯は長さ五尺、廣さ一尺八寸、其の頭に馬髮を編みつけ、赤白の土墨を以て鈎形を書きたりとある、此樣な楯は我が日本民族中、獨り隼人のみの使用せるものであるが、然るに南洋土人の中には之に酷似せる楯を用ふるものがある、それはボルネオ島に住めるダヤック族で、此の蠻族の使用する楯は頭髮を附して裝飾となし、又た曲線の結合より成れる連續模樣を描き、赤色の彩色を施し、楯の大さは長さ三四尺、幅一尺五寸を通常とする、此の如き事實は『延喜式』に記せる隼人の楯と殆ど相一致せることを示すもので、沼田賴輔氏は之を以て隼人の南洋渡來のダヤック族たるの證左の一とせられた、其他、ダヤック族の黥面文身をなし、又た舞踏を能くするの俗があり、犢鼻をつける風のあるが上にも其の性質の强猛勇悍なるより見て、隼人族とダヤック族の間に密接の人種的關係のあることは否定し得られない、而てダヤック族は現在南洋のボルネ

オ島に住み、スマトラ島に住めるボツタスや、セレベス島に住めるアルフルス族等と同じく印度ネジアンに屬する蠻族である、其の體質を一言すれば身長は甚だ低くして平均一五七仙迷、頭形は長頭若くは中頭で、頭蓋指示數は平均七八、五である、思ふに此の如き印度ネジアン族は先史時代に於て南洋方面より海を航して九州南部に渡來し、薩摩、大隅、雨肥等に移任して部落を形成したものである、蓋し『魏志』に記載せる『狗奴國』『唐書』倭人傳に記載せる『波邪國』は思ふに印度ネジアン族たる熊襲、隼人の占據せし大部落であつたらしい。

【八】肥人

肥人といふ名は奈良朝時代に於ける古史書『續日本紀』『播磨風土記』等の中に散見せる種族名で、日向の肥人といひ、阿多の肥人とい

ふが如き名稱の上から見れば、九州の南部に住みしことは明かであり、又た其の異種族として取扱はれしことは『大寳令集解』に、夷人雜類として、毛人（蝦夷）に均しいものとせられてあるに徵しても明かである。

肥人は元と九州の肥后の國のあたりにゐた民族の名で『くま人』と訓せし學者もあるが、併し肥の文字は元來火の國の『火』の文字音にあてた『ヒ』の音を表はせるものである故肥人は『ヒヒト』又たは『ヒのヒト』と訓むべきものであらう、而て此の肥人に黥面の風ありしことは之を直接に史上の記事に徵すること能はざれども『播磨風土記』に日向の肥人朝戸君の猪を飼へることを記してあり、而て古代牧畜を業とせし猪飼、鳥飼部等に黥面の風ありしことに徵すれば、肥人にも此の風習のありしことは想察するに難くない

又た萬葉集にある相聞の歌の中に、肥人の染木綿を以て額髮を纒へ

る風習あることを知るべき歌がある、其の歌に曰く『肥人の額髪に結へる染木綿のそめし心は我れ忘れめや』と、此樣な事實は彼の『魏志』に倭人の俗を記したる中に『木綿を以て頭に招く』とあるのと一致せるもので、這般の風習は今に至るも薩摩地方に行はれ年若き輩が舞踏をなす際、彩色の綿布を頭に纒ひ、所謂鉢卷をなすのは古代よりの遺風らしい。

我國の中古時代の頃まで、肥人の書、薩人の書と稱せられ、一種異樣の文字を以て記るされたる書物があつて『本朝書籍目錄』にも肥人書五卷を掲記し、又た『釋日本紀』中にも、大藏省御書の中、肥人の文字六七枚ばかりありしと記してある、而て此の肥人の文字は元とヒフミ文字と稱せられしを、日文文字に轉化し、神代文字と誤認するが如き次第となつた、藤原相之助氏は此文字を以て南洋スマトラ族の使用せる原始的文字に符合せること多きを述べ、久米邦武氏は、肥人

書といふ神代文字は苗族の文字に似たる音聲字で、今に用ひる假名のツのへの三文字は其の遺留品だと說かれた、いづれにしても肥人が南方系の異種族で特殊の文字を使用せしことだけは明かである私の觀る處を以てすれば、此の肥人なるものも矢張り熊襲、隼人と同種の異民族で、特に肥后の國あたりに住みし印度ネジアンであつたであらうと思ふ。

(三) 總括

上記の如く、倭人には『海人』『熊襲』『隼人』『肥人』等の種類があり海人は恐くは印度支那族、熊襲、隼人及び肥人は印度ネジアン族と看做すべき者である、而て此等の種族は九州全島に分布して、それ〳〵數多の部落を作つてゐたが、併し九州以外の諸地方にも多く分布せしことは『魏志』に『海を渡る千里、國あり此の倭種』とあるを見

て明かである、想ふに支那方面及び南洋方面から九州に渡來せし上記の異種族は更に山陽、山陰、四國、畿內等の沿岸にも進み、內地に入り込んだことは明かであり、又た有史以后に於ても隼人族の中、皇城守護の兵士となり、帝都に參觀交代したものには故郷に歸らずして畿內、紀伊、丹波等の諸國に散住し、その他、諸國の地方に移住せし者もあつて、日本民族に同化混血して了ふかものも多かつたに違ひない、されば日本民族の血管中には印度ネジアン種族の血液も流れてゐるので、此の關係の上から見れば、南洋諸島に住める强悍獰猛の蠻族や臺灣の生蕃等は吾人日本人と親族である。

日本民族は上記の蠻族と人種的關係を有するの他、現在フィリッピン諸島の內部に住める短身黑色の土蠻ネグリトーの血液をも稟けてゐる、此の種族は矢張り印度ネジアン系であつて、身長極めて低く且つ縮れ毛で皮膚は黑色である、日本人の中、色の甚だ黑く且つ縮れ

毛のものは僅かにネグリトーの血液の濃厚なるもので、九州人の中には此種の人間が尠くない、思ふに先史時代の頃、ネグリトーは南洋方面から黒潮や風に流され或は丸木舟に乘つて九州に來たものらしい、日本人中の縮れ毛のものが此の蠻族の血液を稟けてゐることは佛國の人類學者カートルファージ及びアミー等を始め鳥居龍藏氏の夙に認めてゐる處である。

尙ほ一言すべきは九州南部に頭髮の甚だ長い女子の多く存することである、此事は『古事記』中に、日向の髮長姬に關する記事を見ても其の一班を知ることが出來る、又た現に八丈島に於ける女子も頭髮の長きを以て世に知られてゐる、南洋諸島には日本の美人に髣髴たる髮の長い色の割合に白い女性を見ることが尠く無い。

（六）土蜘蛛

古史に屢々見ゆる處の『土蜘蛛』なる一種の蠻族は『攝津風土記』の中に『此人恒居穴中、賜賤號曰土蜘蛛』とあるに依れば、穴居の先住民族全體に與へたる名稱らしく、所謂土籠りの義であつて、それが土蜘蛛と轉訛したのかも知れない、併し穴中に住みし異種族には古史に記する處に依るに、佐伯（蝦夷）、國栖、土蜘蛛等があり、而て佐伯と土蜘蛛とは同じ穴居の蠻族でも、其の種族を異にしてゐたことは『常陸風土記』に『古老曰、昔、國巣（俗語曰、都知久母、山之佐伯、野之佐伯、普通堀土窟常穴居』とありて、兩者を區別してゐるのを見ても判かる、それ故、土蜘蛛が『アイヌ』種族でないことは明かであり、又た土蜘蛛の分布區域は啻に東國北陸のみならず、廣く畿內、九州に亙り、殊に大和地方には天武天皇東征以前より汎く棲住し、多大の勢力を有して皇師に抵抗し又た九州にも諸地に土蜘蛛の住み、景行天皇の代に至て之を征討せられ、次で日本武尊の西征となりて此の蠻族

を掃蕩せられた等、いかに土蜘蛛の全國に廣く蔓延して猖獗を極めてゐたかを知り得られる。

土蜘蛛といふ名稱は、前述の如く『土籠り』の意に解釋すべきものであるが、併しこゝに一言すべき天孫民族に於ても亦た同じく穴居の風習のありしにも拘はらず、何故、天孫民族が特に土蜘蛛といふやうな稱呼を以て自他を區別したかといふ疑問である、この疑問に就ては嘗てドクトル、マンロー氏の說明がある、同氏は南九州に於ける石器時代の遺蹟を調査したる結果『絕對の隱れ塲所』と認むべき土窟に遭遇した、此の土窟は墜道組織になつてゐて、其中に小さい室があり、其の室の中には泉がある、恐くは此の中にて數週間位生命を支へることが出來やうけれども、到底住所として使用せられたもので無い、屹度最后の手段として用ゐた避難所である、これは慥かに土蜘蛛の作つたもので、彼等は之に一時隱れて屢々追擊者を苦しめた

のであらう、されば土蜘蛛なる言葉は文化及び民族關係の相違を示すものらしく思はれる、と云ふのがマンロー氏の說である、或はさうかも知れない、天孫民族にも穴居の風はあつたが、併しそれは家屋的の住所であつて隱れ塲所では無かつた、之に反して土蜘蛛は穴を隱れ塲所としてゐたのであるから、天孫人種より斯く呼ばれたのかも知れない、然らば土蜘蛛なるものは人種學上如何なる者かと云ふに古史の記事だけでは殆ど不明である、唯だ此の蠻族に就て聊か分つてゐるのは其の下肢の長いことで、卽ち『常陸風土記』に『都知久母、又夜都加波岐（八掬脛）と見え、又た『日本紀』に『有土蜘蛛、其爲人也、身短而手足長』とある、神武天皇の皇軍に抵抗せし長髓彥は恐くは土蜘蛛であつたかも、知れない。

土蜘蛛と異名同稱のものに『國栖』といふのがある『姓氏錄』に『神武天皇行幸吉野時、川上有游人、于時、天皇御覽、卽入穴、須臾又出游

窃窺之、嘆問、答曰、石穗押別神子也、爾時詔謂國栖之名』とあるが『常陸風土記』を見るに『國巣、俗語、都知久母』とあるから、國栖と土蜘蛛との同一の種族たることが明かである、而て此の國栖と稱せられしものは、大和の吉野に住みし穴居種族であつて、早くから大和朝廷に歸服したものである。

私等の觀る處を以てすれば、土蜘蛛なるものは先住民族の一なる彌生式種族と系統を同ふせるものであるが、文化の甚だ低かりし劣等種族であるまいかと思ふ、同じ彌生式民族でも、九州に占據せし『倭人』の如きは『魏志』の記事に徵するに、夙に支那と交通して其文化に接し、其中『倭奴國』の如きは、漢の光武帝から金印を賜つたことさへある、又た『女王國』の如きは、莊麗なる宮殿や墓陵等があつて、文化の著るしく進める王國であつた、又た『肥人』は特殊の文字を使用してゐた程であるから、是れ亦た可なり文化の開けてゐたも

のに違ひない、然るに同じ彌生式民族であつても、土蜘蛛の如きは極めて文化の低劣なりし土蠻であつて、有史以後に於ても蒙昧の野蠻の域を脱せざりしのみならず、天孫民族と同化するの機會を失ひ、天孫民族より賤視せられて『土籠り』『土蜘蛛』のやうな名稱を附せられたものであらうと想はれる、同じ先住民族でも『アイヌ』の中には早くから天孫民族に同化せしものは佐伯部となりて宮闕守護の兵士となり、又た倭人の中、早く天孫民族に歸服せしものは、所謂久米部となつて佐伯部と共に大和朝廷に奉仕したが、唯だ之に取り殘されしものが、東北に割據せる蝦夷となり、九州に割據せる熊襲、隼人となり、畿内に横行せる土蜘蛛となつたのであらう、斯く考へてみると、近畿中國等の石器時代の遺蹟中に發見せらるゝ彌生式土器及び人骨は或は土蜘蛛の遺物ではあるまいかとも思はれる、古史には既に蝦夷といへる『アイヌ』種族の存在を認め、又た其の遺物遺蹟も

夙に發掘發見せられたから、同じく古史に於て、土蜘蛛といへる種族の存在を認むる以上は、其の遺物遺蹟も亦た必ずや存在するに違ひない、私等は此の點から考へて、近畿、中國等に發見せらる、彌生式の土器及び短頭型の頭骨及び人骨を以て、先住民族の一種たる土蜘蛛の遺物であらうと推測する。

近畿、中國、九州に於ける彌生式土器を伴ふ遺蹟より發見せらる頭骨が短頭型である點より推測して、彌生式民族は短頭型なる朝鮮、滿州に系統を有する石器時代の民族、所謂、原始日本人又たは固有日本人であるとは、鳥居、濱田氏の說であるが私は此の點に於て一の疑問を抱いてゐる、素より滿州及び朝鮮民族の頭蓋が概して短頭型であることは夙に專門家の認めてゐる處であるが、併しこれは現在の滿蒙人朝鮮人の頭蓋に就て測定したものである、古今に於ける人類の骨體が同一の種族間に於ても必ずしも同一で無く、且つ他種族と雜婚

混血する結果として變化を來たすことは明白なる事實であるから石器時代の遺蹟より發掘せし人骨の研究に依て直ちに現代の民族の骨體と比較類推し、以て先住民族の本性を決定せんとするが如きは餘程の注意と考察とを要すべきことで無い乎と思ふ、無論、人骨の研究も大に必要である、さり乍ら又た之と同時に古傳說及び遺物等をも充分に參考しなければならない、此點に於て私は近畿、中國等に於ける彌生式土器を伴ふ石器時代の遺蹟より發掘せらるゝ、人骨によつて直ちに彌生式民族を天孫民族と同一種族たる原始日本人、卽ち石器時代の頃より三々伍々朝鮮を經て我國に移り來りし滿蒙民族と斷定するに躊躇せざるを得ない、少くとも近畿に於ける彌生式の遺蹟及び遺物は夙に天孫民族より異民族として取扱はれたる種族のものたることを推測せしめる、近畿地方に於ては土蜘蛛の甚だしく横行し、强大なる勢力を張つてゐることは國史に明かなる處で

神武天皇東征の皇師に手强く反對せし八十梟師、長髓彥、名草戸畔等の如きは近畿に蔓布せし土蜘蛛族の酋長と認むべきものである、さり乍ら、此の土蠻の人種的位置に至ては固より明瞭でなく、唯だ前述の如く下肢の比較的に長いと云ふ傳說の存するに過ぎない、併し南洋方面から渡來せし印度ネジアン族或は類似黑奴の類ではあらうか、少くとも土蜘蛛の中には、ネグリトーの如き短身黑色の蠻族の混在してゐたやうに思はれる。

（七）日本に於ける南方系の風俗

上述の如く、我が日本人は印度支那族、印度ネジアン族と血族的關係を有つてゐるから、日本古來の風俗中には南方系の風習の混在し、又た其の痕跡と認むべき者も尠くないのである、其の中から特に若干を選んで左に少しく叙說してみやう。

我日本人は上古時代より一般に沐浴を好む慣習がある、古來宗敎的儀式の一として行はるゝ處の『みそぎ』（禊）は、元來河海に浴して其の汚穢を洗滌するのから起つた式であつて、彼の熱帶地の民族が川又たは海に入りて全身を洗滌する風習と何かの因緣關係があるらしい、蓋し日本の先住民族の一として九州全土及び本島の沿岸に汎く棲住せし『倭人』は前記の如く南方系の種族であるから、此種の熱帶民族の慣習が天孫民族にも傳はり、元と熱帶に在りて河海に浴したる風習までも波及したのであらうと思はれる、殊に我國の氣候は一般に温暖であつて、南部の如きは暑中殆ど熱帶氣候と選ぶ處がない程である故、民族一般に沐浴を好むに至つたものらしい、而て『みそぎ』なる宗敎的儀式が河原に於て營まれることになつてゐるのは蓋し熱帶民族の河海に浴する習俗に淵源せるものと認むべきである、而て其の沐浴を好む風習は、一方に於て平素温浴をなす慣

習を生じ、各人其の邸宅の一部に『温室』『風呂』を設けることになつた、併し一定の共同浴場を設けて衆人を浴せしむるが如き風習の起つてきたのは、恐くは平安朝時代の中期以后のことらしい、而て共同浴場の起源が僧侶の慈善的行爲に出でたことは慥かに事實らしく思はれる（此のことは茲に要なきが故に論せず）

我國の家屋の建て方が熱帶式であることは誰れの眼にもつくことで、防寒の準備が出來て居らず、田舍へ往けば、竹の柱に萱の屋根といふ風である、而て南洋に於ける家の建方は、今も合掌建であつて、我國の神社に見るが如き千木、葛結木が戴つてあり、屋根は木の葉で葺いてあるが、我國でも今も田舍には茅葺の家が甚だ多い、それから、南洋では厠を川の上に設け、糞便を川水中に流し去ることになつてゐるが、我國でも厠を訓して『かはや』といふのは、古代に於て川の上に厠を設けし風習のあつたことを暗示せるものである。

南洋の土人は人の知るが如く、檳榔子を嚙む風俗があるので、其のため齒は眞つ黑に染まつてゐる、そして檳榔子を嚙むのは、結婚期から後のことで、齒の黑くなつたのを美しいと見る慣習になつてゐる、我國に於ける涅齒の風習は之に關係あるに相違ない、但しこれがいつ頃の時代から一般の民俗間に擴がるやうになつたかは明白でないが、其の起源は必ずや上古時代に泝るべきものだと思ふ。

南洋には鷄を鬪はす風俗がある、元來、鷄の原產地は南洋の瓜哇であり、又た鷄を一にシヤモと云ふのは南亞細亞の暹羅から傳つたことを意味せるもので、恰も南瓜を一に稱して『カボチヤ』といふの類である、我國でも鷄は夙に神代の頃から在つて常世の長鳴鷄といふやうな名がある『常世』とはいづこの地を指したものであるか不明であるけれども『日本紀』に多遲摩毛理が應仁天皇の命を奉じて常世の國に橘果を取りに往つたといふ記事に徵すれば、支那大陸

の南部或は南洋を以て常世國と認めねばならぬことになる、何とな
れば柑橘は暖國の産であるからである、それは兎に角、南洋は鷄の本
場であつて且つ鬪鷄をなすの俗があり、我國に於ても神代の頃より
鷄があるのみならず、古代より鬪鷄の行はれしことなどを見ると、其
の間に何等かの關係の存することを思はしめる。
日本人の陰莖は龜頭が裸出してゐる、これは少年時代の頃から機械
的に包皮を下方に牽退せしむる爲めであるが、併し其の起源が、割禮
にあることは殆ど疑ふべくも無い、割禮とは宗教的儀式の下に人工
的に陰莖の包皮を切斷するの謂ひであつて、南洋諸島に於ては今に
至るも猶ほ行はれてゐる、思ふに、先史時代の頃、南洋より吾國に入り
來りし人間の間には母國の風習を守つて包皮を切斷する俗があつ
たのを、天孫民族支配の世となりてより以來、此の風習の廢絶した代
りに、其の遺風として、少年時代の頃より包皮を下方に牽退せしめて

龜頭を露出する因習を生じ、これが次第に一般民族間に擴がつて日本の民俗の一となつたのであらう。

日本人が犢鼻をしめるのも亦た南洋傳來の風習である、支那人や朝鮮人には日本人のしめるやうな犢鼻がない、南洋土人の褌の長さは四尺幅一尺位で、芭蕉或は樹皮をなめして作り、其の形式に於て日本人の褌と少しも違はない、其のしめ方も同じである、唯だ前後の兩端を長く垂れ下げて置く相違のあるに過ぎない、而て我が國史上、隼人の祖先なる火蘭降命が犢鼻をつけたといふ傳說に徵しても、犢鼻が南洋の風俗であつて、その始めは南洋土蠻の后裔たる隼人族の締めてゐたのが漸次一般の日本人にも普及するに至つたことが明らかである。

我國の上古時代には『歌垣』と言つて、時々多數の男女が山上或は市場に集合し、互ひに歌謠を唱和して戀の相手を求めた風習があつ

たゞこれは濫婚の遺風とも見るべきものであるが、南支那に於ても太古時代には之と同様の俗があつた『簷曝雜記』に粤西の土民、滇黔苗猓の男女が春毎に相集つて自由に婚媾した風のありしことが記載してある、これは或は偶合かも知れぬが、兎に角、印度支那族の住みたる南支那の太古時代にも我國の上古に行はれし歌垣同様の風ありしことを思ふと、或は其の傳來では無いかとも考へられる。

(八) 大和民族

(イ) 故郷

大和民族は卽ち天孫民族は則ち日本人の幹部であつて、其の智力と武力とによつて先住民族を征服し或は同化して極東に日本帝國を建設せし優等民族である。

我國の古傳說には此の民族を以て高天ヶ原より日本の地に降臨せるものと云つてゐるが、併し高天ヶ原なるものは、其の名稱の示すが如く、蒼天の謂ひであつて、地上の場處を指したものとは思はれない然るに從來國學者史學者の中には高天ヶ原を以て日本國內に在りとし、皇祖の都地なりと說く者もある、例へば新井白石の如きは常陸國にありとし、伊勢貞丈等は大和國にありといひ、日本人が其の祖先を尊敬する處から、天になぞらへたる者であるといつた、成程、大和には天の香山、天の高市といふ處があり、而て高天ヶ原の世界にも矢張り之れと同じ名の山や土地があるから、高天ヶ原を以て大和の地なりと推定したる伊勢貞丈の說も滿更根據の無い說とは云へぬが、併し古史の上に記載せらるゝ、高天ヶ原は其の文字通り天上の世界であつて、今日より之を觀れば固より空想の世界である、而て『古事記』『日本紀』に見ゆる神代の說話は、蓋し大和朝廷の時代に作爲せら

れたものであつて、決して原始的の神話と看做すことは出來ない、其の證據には種々あるが、元來『古事記』『日本紀』は第八世紀時代、即ち今を去ること千二百餘年前に於ける官撰の國史であるものゝ、其中には大和朝廷時代の頃に作爲したものらしい記事が尠く無い、例ねば伊弉諾冊の眼から日の神、月の神の生れたと云ふやうな話は盤古氏の兩眼が日月になつたといふ支那の神話の模倣らしく、又た伊弉諾冊の黄泉に行きて鬼に追はれし時、桃の木の下に身を隱くして桃の實を採つて鬼に投げつけ之を逐ひ拂つたといふやうな話も矢張り支那の傳説から來たもので、即ち支那では太古より桃は鬼魔を除ける力のあるものと信じてゐた、それが我國の神話に混入してゐるのである、それから又た神代の話の中には保食神の身體から蠶の出來たとあるが、併し我國に蠶を飼つて絹布を織るやうになつたのは、日本に來た支那人から始まつたことで、決して太古時代の初めか

ら我國に蠶のあつた譯ではない、然るに神代の話の中に、蠶のことがあるのは、畢竟漢人が日本に來た后のことであつて、保食神の話の如きは大和朝廷時代の頃に出來たものに相違なからうと思ふ、此樣な事柄は其他にも多くあるけれども煩はしいから略して置く、されば高天ヶ原に關する神話も、必ずしも悉く原始的のもので無く、后世の思想が餘程之に加味してゐることは疑が無い、現に高天ヶ原には天の香山、天の高市など云ふ山や土地があるやうに記してあるが、併し此の山や地は太古より大和にある有名の塲處である、神代の說話が大和朝廷時代に出來上つたものとすれば、高天ヶ原の香山も高市も當時の皇都たりし大和の名所から其名を取つたものであらう（此の事に就ては津田左右吉氏の神代の新硏究を參考すべし）

以上の如き譯であるから、高天ヶ原は決して地上に現存せし者でなく、文化思想の開發せし后に出來たる抽象的空想的世界と見るべき

ものである、されば、大和民族が高天ヶ原より日本に降臨云々の說の如きは、單に一の古傳說に過ぎない、從つて之によつて大和民族の由來を說くことの出來ないのは初めから分かり切つたことである。然らば大和民族の祖先の故鄕は何處であるか、之に就ては從來種々の說があつて、或は南洋なりといひ或は支那なりといひ、或はベブリュー種族の一たるヒッテット人の都せしハマトの地なりといふが如き說もあるが、併しいづれも根據なき臆想に過ぎない。

抑々日本民族はベルッの說に依るに、二種の原型に區別することが出來る、一は體格の羸瘠優柔で、顏面細長、眼斜めに鼻艷曲、口小にして頭骨の長きもの、他は體格の强健にして鼻低く、口大にして顴骨の著るしく突出し頭骨の短いものである、前者は蒙古種族にして、後者は馬來種族であるとは、ベルッの夙に論せし處である、必ずしも正確なる見では無いが、併し日本民族の中心たる大和民族が其の體質に於

て北蒙古種族たることを示してゐるのは一見明瞭である、蓋し蒙古種族は、之を人種學的に區別すれば、一はツングース或は北部蒙古族であつて、其の體質をいへば顏面は圓形式は卵圓形を呈し、頭型は亞廣頭（生體指示數八三）で、頭髮は黑く且つ直、體毛は少く、皮膚は光澤なき黃色或は黃褐色を呈し、顴骨は突出し、眼は一種特有なる『蒙古眼』を具へてゐる、而て其の地理的分布は、北支那、蒙古、朝鮮等である、他の一は南蒙古族で、此種のものは、殊に南方支那及び印度支那族が之に屬し、顏面は方形或は菱形を呈し、顴骨は甚しく突出し、頭型は多くは亞廣頭である、今我が大和民族に就て之を見るに、其の頭型の殆ど廣頭に近き中頭なること、所謂蒙古眼を具ふること、顏面の圓形或は卵圓形なること等は其の北部蒙古族に殆ど一致せることを示してゐる。

啻に體質ばかりで無く、其の風俗、慣習、及び言語に於ても、大和民族が

蒙古を本國とせし勾奴、突厥、滿州を本國とせし鮮卑、女眞等の種族と其の祖先を同ふせることは明かである、即ち大和民族の故郷は滿蒙の地で、其の祖先は東北亞細亞大陸より朝鮮を經て日本島に移入せし蒙古種族であつて、漢民族より北狄と賤視せられたる勾奴、鮮卑、烏丸、女眞等の種族と其の祖先を同ふせる『ウラルアルタイック』語系の種族である、今之に就て顯著なる事實を左に列擧し、大和民族の蒙古種族なることを立證してみやう。

(ロ)本態

抑々大和民族が太古時代より尚武の國と稱せられ、弓矢の道を重んずることは周知の事實である『萬葉集』の和歌の中に『八隅知し我が大君の、朝には取り撫で玉ひ、夕にはいよせ立てにし、御執らしの梓の弓云々』とあるやうに、天皇の弓矢を重んぜられしことを詠ん

である、而て太古以來、大和民族の使用せし矢は鳴鏑といひ『古事記傳』に『射れば空を鳴り行くが雷に似たればなり』と註して『鳴神夫理矢』の義なりとあるが如く、射れば一種の鳴響を發して空中を翔けり行く特殊の矢であつた、而して茲に記憶すべきは、之と同じ矢が匈奴にも使用せられてゐたことである、即ち『史記』の匈奴傳に『冒頓乃作爲鳴鏑、注韋脇曰、矢鏑飛則鳴』とある、加之、匈奴、女眞の騎射の道に長せる勇武の民族たりしことは史上明白なる處で、我が大和民族も同じく騎射を善くせる馬上の雄者であつた。

大和民族は上古時代には肉食の國民であつた、崇神天皇の御代に、男子に弓珥の調を課せられたのは、一般の人民が狩獵に從事し、獸肉を食にしてゐた證據であつて、即ち弓珥の調とは山野に獵せし鳥獸のことを意味する、それから、肉人部、猪甘部、鳥養部等といつて鳥獸を飼養し、其の肉を朝廷に供する民があつた、又た上古時代より神に獸肉

を献じ、又た牛酪を飲用する慣習ありし等、我が大和民族の肉食を事とせしは、取りも直さず、東北亞細亞大陸の沍寒荒漠の地方に住みし遺習と認むべきもので、這般の風習の匈奴、突厥、鮮卑、女眞等にも行はれ、其の獸肉を食し、牛酪を飲みしことに徵しても、亦た大和民族の由來を推知するに難くない。

我國の太古時代には太占と云つて、男鹿の肩骨を燒き、神慮を伺つて事の吉凶を占ふた、此の占法は中古時代に入りて支那龜卜の法の傳はりし以來、全く滅して了つたか、上古の世に於て其の大に行はれしことは、天の香山の男鹿の肩を抜尺取つて占つたといふ『古事記』の記事に徵しても明かである、然るに蒙古に於ては羊の肩骨を燒いて吉凶を占ふの法があつて、今に至るも猶ほ行はれてゐる、嘗て吾國に蒙古人たる喇嘛教の貫主阿嘉氏の來游せし際、故田口卯吉氏は同氏を訪ふて羊肩を以てする占法を問はれたことがあつた、此の如く

蒙古にては羊の肩骨を以てし、我國にては鹿の肩骨を以て吉凶を定むる占法があり、其の異る處は唯だ動物の種類の相違せる迄であつて、其の共に骨卜であり、又た其の燒き方も同じであるのを見れば、我が大和民族の亞細亞大陸から日本に移住するに至つて後、何かの便宜上、羊の代りに鹿の骨を用ふるやうになつたのであらう。

大和民族の信せる宗教、即ち神道が、滿州に行はるゝ女巫の宗敎、所謂シャマ敎 Shamanissm と其の形式內容を同ふしてゐることも亦た大和民族の本性由來を推知するに足るべき一資料である、シャマ敎は女巫の神に奉侍して神意を傳へ、人事國事を豫言する巫敎であつて其の神を祭るや、神杆と稱せる木を立てる、我國に於ても上古時代より神祇に仕ふる者は女性で、伊勢の神祠には皇女の奉侍せらるゝ例になつてゐた、又た神を祭る齋主は之を齋媛といつて、是等の女性は神祇の憑附する處となり、其の意志命令を人に傳へて吉凶禍を豫言

した、又た上代に於ける神祭の儀式には『古語拾遺』に記せるが如く眞榊を取りて之に玉と鏡とを懸け、神を頌し又た神に祈つた、這般の事實に徴しても、我國の神道とシャマ敎とが其の形式內容を同じくせることが明かである、而て太古時代に於ける韓國中の一分國なる馬韓にも同樣の風があつた『後漢書』東夷傳に、馬韓の風俗を記して『諸國邑、各以二一人一主二祭天神一、號曰二天君一』といひ『立二蘇塗一立二大木一以懸二鈴鼓一、事二鬼神一』とあるが、我國の上代に於て、國縣の產媛が祖神を齋ひて祭主となり其の人民を領したとや、又た鈴と鼓との我が神道の祭事に主用せらるゝこと等に比すれば、兩者其の趣きを一にしてゐる、而して此の馬韓の民族は實に滿蒙民族と其の種族を同ふせる扶餘族の南下して朝鮮に移つたもので、後日、百濟國を成したものであるが、其の祭神の風習が我が神道のそれに殆ど異つた處のないのも注目すべき値がある、其の他我が神社の前に立てる鳥居が、滿州蒙古

の方面に類似の俗を求め得らるゝことも民俗上明かなる處である
これを要するに、大和民族の本性由來を知る上に於て、大和民族の宗
教が滿州に行はるゝシャマ教と同じく女巫の教たることは慥かに
注目に値すべき一事實と謂はねばならぬ、之に就て一言すべきは、皇
祖天照大神が女性の御身を以てして天上に君臨し玉ひしことであ
る、大神の祭祀を重んじて自ら天神を祭り、神の御衣を造らんがため
に天織女をして忌服屋にて之を織らしめ玉ひしことは『古事記』
に記せる處で、后世に於て倭姫命が伊勢の大祠に奉仕し玉ひし有樣
と全く異つた處がない、而て神に仕事する女巫が神祇の憑附する處
となりて神意を人に傳ふることは、一方に於ては國民の崇拜を受け
一方に於ては民心を收攬し得られる、思ふに女性の御身たりし皇祖
天照大神が天上に君臨して萬人に尊崇せられ玉ひしは、這般の宗教
的關係に由るらしい。

又た大和民族に於ける太陽崇拜も、蒙古の俗に一致する處がある、蒙古の大汗オクダイが即位の時、太陽を拜し部下の酋長に服從を誓約せしめたるが如きは、蒙古に於ける太陽崇拜の習俗を語るもので、此の習俗は大和民族に於て日神の崇拜となり、皇祖を日神として拜することにならしめたものらしい。

上代より大和民族には殉死の風があつた、滿蒙の民族にても亦た此の風があつて、匈奴にては古くから之れが行はれ、君主の死する時、生前之に奉仕せる臣下は皆之に殉じた、支那に於ても亦た同樣の風があつたが、併し滿蒙の地に接せる秦國に於て其の始めて行はれたのを見れば恐くは、滿蒙の民俗から輸入せられし風習らしい『史記』に記する處に依れば、支那に於て殉死の明かに行はれしは周の時代に於て秦の武王の卒せし時を嚆矢とする、我國にては『日本紀』に依るに、垂仁天皇の時代に於て殉死を禁じ、之に代ふるに埴輪を以て

することになつたが、それ迄は歴代を通じて殉死の風が盛んに行はれたらしい、倭彦命の薨ずるや、近習の輩を集めて悉く生きながら陵域内に埋め立てしに、數日にして死せず、晝夜號泣して止まず、其の死后犬鳥之を食つたといふやうな史上の記事を見ても其の一班を知り得られるが、此の如き殘忍なる殉死の風は夙に匈奴に行はれたものである、這般の事實も亦た大和民族の由來を語るものと認めねばならぬ。

滿蒙の語と朝鮮語との相類似し、又た日本の古語中に之に類する者の尠くないことは言語學者の夙に論ずる處で、且ついづれも『ウラルアルタイック』語系に屬してゐる、今こゝに蒙古語滿州語と日本語との類似せるものを少し許り擧げてみやう、母を滿州語で Omo 韓語で Omie 日本の古語にては『オモ』といひ、小兒を滿語にてはアカ Aka 蒙古語にては Akö 韓語にては Aki 日本の古語にては

アギと云ひ、川を蒙語にては Kar 滿語にては Kolo 韓語にては Kainr 日本の古語にてはカレといふが如き、一々數へ立てれば際限が無い此の如く其の言語に類似する者の多いのは、其の種族の同一なるか或は近似せることを自證する者である。

以上擧げたるが如く、我が大和民族が其の體質、風俗、言語等、蒙古滿州の民族のそれに類似せること多きは、慥かに其の祖先を一にし其の種族を同ふせることを示すものである。

（八）派別

大和民族は之を史上の記事に依つて二派に分つことが出來る、一は古傳說に高天原より放逐せられて出雲に下つたといへる素戔嗚命及び其子（或は七世の孫とも云ふ）の大國主命を中心とせる民族で、他の一は高天ヶ原より九州の邊隅たる日向の高千穗峰に降臨し

たと傳へられてゐる天孫種族である。

素盞嗚命及び大國主命を中心とせる出雲民族の本性由來に就ては之を天孫民族と同一系のものと認むる學者もあり、又た之に反して異種族となし、蝦夷系或は南方系のものと看做せる學者もある、而て此の異種族說の中、出雲民族を以て蝦夷系と看做す說は、古史に見ゆる傳說に憑據せる見解であつて、即ち『古事記』に素盞嗚命の『八拳鬚胸前に至るまで云々』とあるに依りて其の多毛なることを認め、又た大國主命の子の阿遲須枳高日子命の『御須髮八握生ふる迄晝夜哭きましして辭通はず云々』とあるに依りて其の多毛なるが上に、言語の不通なりしことを認め、天孫民族とは全く別系の異種族即ち蝦夷系のものと看做すのである其他、素盞嗚命の高天原に於て罪を犯せし時、千座の置戸の刑を科せられ、爪を拔き髮を拔きて其の罪を贖はしめられたといふ傳說の如きも、蝦夷の刑罰に酷似してゐる

處から、出雲民族は何となく蝦夷系のものらしく思はれないでも無い、併し這般の考察は私等の容易に與みすること能はざる處である
想ふに古傳說に於て素盞嗚命や大國主命の子阿遲須枳高日子命の『アイヌ』種族を髣髴せしむるが如き者のあるのは、喜田貞吉氏の論ぜられしが如く、出雲派の代表的人物たる素盞嗚命及び大國主命が、當時北陸奥羽に住せる蝦夷を征討して之を服從せしめ之を同化せしめたる結果、蝦夷たるが如き性格を附與せる古傳說の生じたのではあるまいか、素盞嗚命が『高志』(越の國)の大蛇を平らげ、次で北陸に至りて之を略し、次で大國主命が八十神を亡ぼして越後に赴き、沼河姬を娶つたといふ傳說は出雲系の種族の代表的人物が先住民族の一たる『アイヌ』を征討同化せしことを暗示せるものである、後世大國主命を『ゑびす』神(夷神)と稱するのも、思ふに『アイヌ』種族たる『ゑびす』を平服し或は同化して其の主となつた

爲めでは無からう歟。

是を要するに素盞嗚命、大國主命を中心とせし出雲派の民族は、矢張り大和民族と看做すべきもので、出雲を根據として此處に勢力を振ひ、韓國と交通して韓土の文化を輸入し、國土を經營せし文化的民族と認めねばならぬ、而て此の出雲派の民族は朝鮮を經て我國に移入せしもので、古傳説に素盞嗚命が『妣國振之堅州國』といつた其の妣の國は卽ち母の國の韓國を指せしことに徵しても之を知り得られる、遠く植民地に移住せるものが其の本國を指して母國といふが如く、矢張り母の國卽ち妣國といつた古代民族の心理的感情は今日と別に異つた處は無い、それに、素盞嗚命を始め、五十猛命等の韓國と日本島とを往來せる傳説や、又た天孫瓊々杵命の日向に降臨せられし時『此地者向韓國』と宣ひしとの傳説に依りても、日韓の同族的關係を推知し得られる、思ふに滿蒙の大陸より南下したる蒙古民族の

一部は永く韓國に留りて韓民族となり、支那の文化の感化及び輸入によつて早く其の文化の開發し、他の一部は更に進んで海を航し、一衣帶水の日本島に上陸して出雲及び其の附近の地方を根據となし先住民族たる『アイヌ』の一部分を征討同化して先づ第一に國土を經營したのが則ち出雲民族である。

大國主命が、其の經營せる國土を『高天原』朝廷に献するや、天孫瓊々杵命の降臨となつた、天孫が何故に九州偏陬の地たる日向の高千穂に降臨せられたる乎は固より確かなる史説もないが、想ふに、出雲派の國土献上に依て中國の方面は既に無事なれども、九州には夙に先住民族たる『倭人』(印度支那族、印度ネジアン族)の棲住せるが爲め、之を征討するの目的を以て特に九州の僻地に降臨せられたのではあるまいか、彦火々出見命が、隼人の祖たる火蘭降命と山幸海幸のことで相爭はれたといふ『日本紀』の古傳説は、蓋し大和民族と

先住民族たる隼人族との間に戰鬪のあつたことを暗示するものであつて、火闌降命が失敗し『今より以後、汝の俳優の民とならん』といひしは、つまり先住民族の屈服せしことを語るものである、併し其の後になつて、隼人族の再び勢力を恢復し凶暴を逞うするやうになつたが爲め、遂に神武天皇に至り都を大和に遷さるゝことになつたのであらうと想はれる、然るに一部の學者中には、天孫種族の九州に移住せし事實から推測して、南洋方面より渡來せるものなりと看做し、大和民族の故郷をば南洋の島嶼に求むるが如き者もあるが、併し此の如き考説は、大和民族の風俗、慣習、言語及び體質を念頭に置かざる粗漏の見解に過ぎない又た一歩を進めて大和民族が優越せる武器武力と拔群の政治的才能とを以て先住民族を征服同化し、遂に强固なる國家を組織したる顯著の事實を見ても、大和民族が決して未開の南洋種族に非ることが明瞭である。

大和民族と祖先を同じくする滿蒙民族の中、最初に强固なる王國を建設せし者として漢史に現はれたるは實に扶餘族であつた、彼等は個人としては勇悍なる武人であり、公人としては統御の方に長せる政治家であつた、されば其の屢々四隣を征服して威を輝かし、遂に支那の中世紀に至りて金國を建設し、更に近世紀に至りて淸國を成立して四億の漢民族に君臨するに至つたのである、但し彼等はいつしか漢民族の風俗思想に感染して柔懦に陷りし結果、其の國家の瓦解破滅を來たしたのであるが、併し彼等が化外の胡人として漢民族に接觸せざりし間は勇武剛健なる馬上の雄者であり、又た規律嚴肅なる統御者であつた、而て我が大和民族は實に其の祖を一にし其の族を同じくせる扶餘族が亞細亞大陸に現はせし武力と政才とをば最も遺憾なく日本島に示した者である。

然らば扶餘族とは如何なる種族かと云ふに、今日の滿人と同じ系統

に屬するものであつて、卽ちツングース Tungus 族である、ツングース族は一に北部蒙古族（デニケルの分類に據る）と稱せられ、元來は今の長春、昌圖、哈爾賓から西の方へ掛けて住んでゐた、支那史中に屢々見ゆる處の鮮卑、鳥垣、契丹等も亦たツングース族で、東胡族と總稱せられたものである、而て朝鮮の北部に高句麗なる王國を建設し更に南下して百濟王國を建てたのは則ち扶餘族であつて、我大和民族は實に扶餘族の更に海を航して日本島に移住せし者である。

（九）漢　民　族

日本人の血管内には支那民族の血液が太古時代より流れてゐる、殊に貴族社會の人々に漢民族の血液を禀けてゐる者の尠く無いことは吾人の特に留意すべき處である。

漢民族の日本に渡來して大和民族と同化したのは想ふに天日槍の

一族を以て其の嚆矢とする『古事記』及び『日本紀』には天日槍を以て新羅の王子と記るしてあるから、韓民族のやうに思はるゝけれども『播磨風土記』の記する所に依れば、天日槍の我國に歸化したのは、神代（大國主命の時代）であるから、當時に於ては未だ韓國に新羅といへるが如き分國のあるべき筈は無く、而て新羅は秦韓より起つた者であつて、秦韓は則ち漢民族である故、天日槍を新羅の王子としても、其の種族は漢民族と認むべきものである、而て天日槍の後裔は、但馬諸助、但馬日楢杵、清彥、田道間守等の家系となり、神功皇后は實に此の血液を稟けられたる御方である、此他、天日槍の後裔として世に傳へらるゝ者には『新撰姓氏錄』に依るに、畿内に住みし橘守三宅連、絲井造等があり、又た『筑前古風土記』に依れば、恰土縣主五十迹牛等がある。

秦の徐福が始皇帝の命を奉じ、不死の靈藥を蓬萊州に求むべく、男女

三千人を率ひて海外に航したといふ事は『史記』の如き正史にも見ゆる處であるが、徐福が蓬萊の神仙を求むることを得ずして皇帝の誅を畏るゝの餘り、遂に我國に歸化したと云ふ傳說に就ては正史に載つてないから、其の眞否を明かにすることは出來ないけれども漢書の『義楚六帖』には明らかに徐福の日本に歸化せしことを記して『日本國亦名倭國、東海中、秦徐福將二五百童男五百童女一止二此國一也』とある、而て『後漢書』に徐福の止まりたる塲處をば夷州、澶州と記してあるが『隋書』には此の夷州を以て筑紫國の東方にある『秦王國』と看做してゐる、思ふに徐福の日本に歸化したか否かは固より確實で無いが、併し推古天皇の御宇に於て、九州より東部に秦人の部落があつて『秦王國』と呼ばはつてゐたことを思へば、既に上古時代より漢民族たる秦人の我國に移住歸化したことは明白である秦人の始めて大擧して我國に歸化したのは實に應神天皇の十四年

であつて、秦の始皇帝の後裔と傳へらるゝ弓月君が百二十七縣の人夫を領して日本に渡來歸化した、此の子孫は各地に分散して養蠶紡織の業に從事し、其の姓を秦と呼んだ、蓋し『はた』は機織の業務に因りて起つた姓であるが、之に『秦』の漢字をあてたのは、言ふ迄もなく支那秦朝の遺民たることを言ひ現はしたものである、爾來、秦氏の子孫は大に增殖し、旣に欽明天皇の朝には其の戶數七千五十餘戶を算するに至り、畿內、東海、東山、北陸、山陽等に蔓延したが中にも、畿內の北部山城の地方は其の根據地であつたが、而て秦氏の豪富なりしことは史上に明記する處であり、又た貴紳と婚を通じて自家の勢力を固めたことも顯著なる事實である、此の如くにして漢民族の血液は大和民族中の上流社會の人々にも流入した。

秦人に引き續きて我國に移住歸化せし漢民族は、漢の靈帝の後裔と傳へらるゝ阿知主の一族である、應神天皇二十七年に十七縣の人夫

を率いて歸化し、大和國の高市郡に住んでゐた、爾來其の子孫も大に繁殖して居地狹隘となつたので諸國に分置せらるゝことゝなつた其の後裔の中には吾國の歴史上に有名なる英雄の一人が現はれたそれは阪上田村麿である、阪上氏の外には、山口、平田、佐田、櫻井、畝火氏等があつて、いづれも早くから大和民族に同化せし漢民族阿知使主の後裔である。

阿知使主に次で、日本に來朝歸化せし漢人は甚だ多く、雄略天皇の代に、魏の文帝の血統を稟けたる安貴公が歸化し、其の後裔なる高向玄理は史上に明記するが如く、大化の新政に多大の功勞ありし政治家であつた、又た推古天皇の朝には隋の煬帝の裔なる楊侯忌寸等の歸化する等、支那との交通の發達するに伴ふて、漢民族の移住歸化する者も次第に多くなつた。

以上說くが如く、上古時代より漢人の陸續移住同化して大陸の文明

を我國に輸入し、文化の發達を促したことは固より喋々する迄もないことであるが、其の移住歸化せし漢人の數の甚だ多かりしことは既に雄略天皇の朝に於て諸國に散布せる秦人の數の一萬八千餘人に達し、欽明天皇の朝に於て其の戶口總數の七千五十三戶に達したといふ事實に徵しても其の一班を知り得られる、又た推古天皇の時代には筑紫より東方の國（中國邊）に漢人の一大部落があつて『秦王國』と稱せられてゐたといふことから考へてみても、山陰山陽中には、漢人の殖民地とも認むべき處があつて一國をなしてゐたことが明らかである、されば日本人と雖、其の先祖に泝れば支那民族の後裔に屬する者も甚だ多い、這般の見地よりいへば、日本人と支那人とは殆ど血肉である、殊に我國の貴族間には夙に漢人の血液を混じてゐる、朝廷は申すも畏し、月鄕武門の中にも支那系統の者は決して尠くない、中國の大內氏の如き、薩摩の島津氏の如き、其の遠祖を尋

ぬれば朝鮮半島を經て日本に移住せし漢民族である。
此の如く漢人が上古時代より陸續我國に移住歸化せしが爲め、啻に文化の上のみならず思想上にも多大の影響を及ぼしたことは之を推知するに難くない、殊に我國の上古に於て史官に任ぜられ文事史事を掌りしものは悉く漢人及び其の子孫であつたから、我國の傳說中には漢人の傳說に類する者か多く或は其の變形と看做すべき者も尠く無い、例之ば伊弉冊命の兩眼より日の神、月の神の生れたといへる我國の神話は支那太古の神話たる磐古氏の兩眼が日月になりしといへるに類し、又た蛭子が生れて三歲の後になつても脚のたゝなかつたので、之を舟に入れて海に流したといふ神話は、水蛭三年を經れば冷水を得て活くといふ漢土の傳說の變形と認むべく、又た伊弉諾命の黃泉に赴きて惡鬼に逐はれた時、桃の實を取りて鬼に擲ち之を退去せしめたと云へる傳說は、桃を以て疫鬼を攘ひ得るものと

せる漢人の傳說を附會したものらしい、其他、牛を殺して神を祭る漢人の風習が、皇極天皇の世に行はれ、更に降つて桓武天皇の世にも一時大に行はれしが如き、亦た以て漢人の傳說、思想、風習が日本民族に尠からざる影響を與へたりし一班を知ることが出來る。

漢民族は人種學上より觀るに、身長は概して高く、顏形は長く、頭形は中頭であつて、顏面及び身體諸部に毛髮の少い人種である、而て漢民族の發祥地、搖籃地とも云ふべき處は、黃河の下流一帶の地であつて彼等は支那大陸の西部地方より黃河の沿岸に沿ふて移住し、游牧民族より次第に耕作の民族となつたものである、恐くは、彼等は崑崙山の方面から東方に向ひ、黃河の沿邊に接近せる今日の陝西省、山東省河南省中の個處に來つたものであらう、今を去ること凡そ五千年前彼等は黃河の沿岸に據りて中夏と稱し、四圍の異民族を征服して其の勢力を增加し、支那の文明を開發した、三皇五帝の時代に於ては多

くは黃河の沿岸に都を置き、ことに河北に都したことが多かつた、それから次第に東方にも擴がり、南方にも進んだものである。
漢民族が日本と交通するに至つたのは恐くは戰國時代の末葉から始まつたらしい、それは漢書の記事に徵するに倭國と燕國との關係ありしことが認めらるゝからである、燕國は戰國時代に於ける諸王國中、最も强固と稱せられたもので、此時代にては遼東から遙かに朝鮮の半分までも領有してゐた、而て倭國は則ち『倭人』の住める九州の地であつて、思ふに倭人から燕に向つて交通を始めたものであらう、併し支那と倭國との交通狀態が明白となつてきたのは前漢時代に於て武帝が朝鮮を征服し之を群縣にしてから後のことで、此の時代には倭國は百餘國に分かれてゐたと云ふから、當時倭人の部落は百餘に分かれ、各自部落的の生活を營んでゐたことが推知し得られる、近來九州北部に於て前漢時代の型式と認むべき古鏡及び銅劍

等の發見せらるゝこと尠くないのは、前漢時代の頃より九州土人が漢人と交通せしことを明確に立證するものである、さり乍ら、又た前漢時代のものと看做すべき古鏡及び銅劍が、畿內、中國、四國等に於ても往々發見せられるのを見ると、漢民族の文化は既に前漢時代の頃より日本內地にも進入せしことが判かる、思ふに漢民族の文化は朝鮮を經由して九州に入り、更に九州北部より瀨戶內海を經て中國、畿內、四國等に入つたのであらう、蓋し戰國時代の末より前漢時代に亙れる長い年月の間引き續いて我國に進入せる支那の文化は先づ九州島に部落的生活を營める倭人に尠からざる影響を與へ次第に統一したる國家を形成せしむべき機運に向はせたに相違ない、此の如くにして大陸の文化に接觸し、文化の開發して獨立的統一的の國家を組織したる一倭國の國主は、後漢の初期なる光武帝の代に至つて倭奴國王の印綬を受けた。

後漢以來、漢人と倭人との交通は盛んに行はれた『魏志』倭人傳に『倭人在帶方東南大海之中、依山島爲國邑、舊百餘國、漢時有朝見者、今使譯所通三十國』とあり『後漢書』東夷傳には『建武中元二年、倭奴國奉貢朝賀、使人自稱大夫、光武賜以印綬』と見え又た『魏志』倭人傳に『景初二年六月、倭女王遣大夫難外米等、詣郡、求詣天子朝献、（中略）詔書報倭女王回、今以汝爲親魏倭王、假金印紫綬』とあり、『正始元年、大守弓遵、遣建中、校尉梯儁等、奉詔書印綬、詣倭國、倭王因使上表、答謝恩詔云々』とある、此の如く彼我の交通頻繁であつたから此の時代に於ける漢製の鏡鑑は我國に輸入せられ、又た玉石器の類も輸入せられて、日本民族の文化生活を向上せしめた、而て應神天皇の代に至り、秦の遺民たる弓月君が百二十七縣の人夫を領有して我國に歸化し、次で漢の靈帝の裔なりといへる阿知使主が十七縣の人夫を率ひて移住してより我國の內地には養蠶紡織の道を始め、文藝

史學の大に發達して我國の文明を著るしく增進せしめた。是を要するに日本民族の血管中に漢民族の血液の流れて居るのみならず、其の文化の開發進步も主として漢民族に負ふ處頗る大なることを銘記せねばならぬ。

(十) 漢　族

漢民族が日本に移住歸化して大和民族に同化し、今日の日本人と血肉の關係をなしたことは既に前述の如くであるが、又た支那南方の異民族たる苗族も日本に入り來りて日本民族の一要素となつた。太古時代の支那南部には一種の蠻族があつた、漢史に南蠻と稱するものが即ち之れである、彼等は印度支那族であつて、之を史學上より見れば印度の先住民族である、蓋しアリアン種族に驅逐せられ或は印度の酷熱を厭ひて海上より馬來半島をめぐり、支那南部に來つた

ものである周時代の初め頃までは揚子江以南に棲住し、荊蠻などゝ稱せられてゐた、今日の南支那は有史以前から印度支那と連續して其の人種は所謂三苗種族である、舜の時代に至て漢民族より征討せられて次第に其の獨立を失つたが、然るに周代に至ても尚ほ荊蠻なる名の下に其の存在を認められ、春秋の初め、楚國を興して漢民族たる秦と覇を爭ふに至つた、而て呉も越も亦た印度支那種族たる苗族の系統である、漢史に倭人の風俗を記して『朱儋崖耳』に類せることを記してあるが（『魏志』倭人傳）其の朱崖儋耳と稱するは呉及び越の地を指したものである、而て呉越は即ち苗族の系統であるから、從つて日本先住民族の一たる倭人に、苗族系の血液を禀けたる者のあつたことは容易に推知し得られるのである。

今日に於ても苗族は貴川省を中心として其の附近の各地方に分布してゐる、上古時代に於ては呉、越、楚の王國を建設して勇悍の戰士な

りし彼等も今では境遇の感化によつて温順なる種族に化した彼等の人種學的徵候は身長低くして平均一五五仙迷許に過ぎない頭形は亞廣頭であり、軀幹の割合に下肢は短い、頭髮は多く密生して漆黑色を呈してゐるが、鬚髯は少い方で顏形は圓く、眉毛は濃厚であつて其尾端は殊に太くして下つてゐるのが其の特徵である。

日本に入り來つた苗族は有史以前の時代より汎く內地に分布してゐたものらしい、それは苗族の製造に係る銅鼓と其の意匠模樣を殆ど同じくする銅鐸が太古時代より今日に互つて我國の諸地方の土中より發掘せらるゝからである、銅鼓は獨逸の學者へーゲルの特に精細なる硏究をなし又た我國にては鳥居氏の綿密に調査せられし南支那の產物であつて日本の各地に發掘せらるゝ銅鐸は之と甚だ類似せる點が尠く無い、即ち兩者共に渦紋もあり、幾何學的線條もあり、又た銅鐸に刻せらるゝ鳥が銅鼓の水鳥に酷似せることや、人物の

杵をもつて臼をついてゐる圖や、船の形の模樣なども亦た殆ど符を合せる如くである、されば日本の銅鐸が印度支那族系たる南支那の一民族苗族の銅鼓と必然の關係を有せることは殆ど疑が無い、但し喜田貞吉氏は日本の銅鐸を以て我國に移住せし漢民族たる秦人の遺物なりと唱へられてゐる、其說に依れば銅鐸は先秦時代に於ける銅鐘の系統に屬するものであり、又た一面に於て我國に移住せし秦人が畿內を中心とせる諸地方に多く蕃殖したといふ史實に徵し、銅鐸の近江、大和、播磨、三河、遠江、伊豆等を始め山陽四國にも發堀せらるゝこと、而て石器時代の遺跡や古墳時代の遺物中に之を發見せざる等の事實をも參酌して、秦人の遺物と推定せられたのである、併し前記の如く、銅鐸の意匠模樣等が苗族の製作に成れる銅鼓に酷似することは喜田氏の說に裏切るもので、どうしても鳥居氏の銅鼓系統說の方が論據の確かなやうである、尙ほ又た久米邦武氏の說に依るに

苗族も亦た文字を有し、日本に肥人書といふ神代文字は苗族の文字に酷似する音聲文字であつて、今に用ひる假名のッ、の、への三文字は其の遺物であると云ふことである、兎に角苗族の我國に入り來つたことは少しも疑がないが、併しいつ頃南支那から日本に來たかといふことは固より明かで無い、されど、彼等が日本の内地に分布したことは前記の如く諸地方より銅鼓系統と認むべき銅鐸の發見せらるゝことに徵しても明かである。

抑々銅鐸といへる古器は銅製の薄い小さな釣鐘樣の器物であつて其の上端に馬蹄鐵形の取り手がついてある、これが始めて地中から發掘せられたのは天智天皇の時代で近江國より發掘せられ、次で、元明天皇の恒銅時代には大和國より出でた爾來、播磨、參河、遠江、伊豆を始め、四國、山陽中にも發掘せられた、而で特に注意すべきは、石器時代の遺物や古墳時代の遺物中には之を見當らない事である、それ故、考

古學者一般に信ぜらるゝ處に依れば此の古器は決して日本人固有の遺物でなく、必ずや文化を異にする一種の外來民族が吾國古代に移住して之を殘留したものに違ひないとのことで、鳥居氏の所說には、銅鐸の輪廓に描かれてある圖樣を見るに『長い杵と臼で穀物をついて居り、又た大きな弓をつがへて動物を射たり、又た、多數の人の乘つた舟があり、其人等は麻織りの無袖の裾の短い半體衣を着てゐる』而て此の如き圖樣は古代の南支那(揚子江以南)より遺物として發掘せらるゝ銅鼓にある圖樣と一致してゐるから、恐くは銅鐸も南支那に於ける印度支那族の手に成つたものであり、而して其の種族は苗族であつて、古代日本に渡來して殘して置いたのが卽ち銅鐸であらうと云ふのである、之に對しては前記の如く喜田氏の秦人遺物說もあるが、併し鳥居氏の『銅鼓考』及び『苗族調查報告』等に就て、銅鐸に關する記事に對照してみると、鳥居氏の說の方が論據の確

實であるやうに思はれる、沼田頼輔氏も亦た苗族の遺物なるべきことを論せられた、銅鐸の圖様は、明かに楊子江以南の地から出る銅鼓のそれに一致して居り、從つて銅鐸が南支那に古くから在住せる印度支那族たる苗族の手に成つたものらしいとの推定は蓋し眞に近き見解と認めねばならぬ。

苗族の血液が今に猶ほ日本人の血管内を流れてゐることは、日本人に短身者の尠からざる事實が之を證明してゐる、前既に述べた通り苗族は身長の低い種族である、それに眉毛が濃厚であつて、其の尾端が太く且つ下がつてゐることは其の人種的特徴であるが、我日本人中にも這般の徴候を具備してゐる者が決して珍らしく無い、但し身長の低い日本人が必ずしも悉く苗族の血液を稟けてゐると云ふのでは無い、既に記述して置いた如く、ネグリトーに關係ある者もあらう。

是を要するに日本人の血管内には北支那種族たる漢人の血液と、南支那種族たる苗族の血液とが共に流れてゐるので、日本人と支那人とは實に骨肉關係を有つてゐるのである、されば日本人の血液は或部分までは支那人の血液たることを思はねばならない、然るに今日に於ては日本人は支那人を輕侮し支那人は日本人を排斥して犬猿啻ならざるが如き狀態にある、苟くも上古時代以來、支那人の血液が日本人の體內に流れてゐることを思はゞ、此點から見ても日支親善の道を講ずるの要がある。

(十一) 韓民族

日本民族と韓民族との濃厚なる血液的關係を有つてゐることは古代より知られてゐる處で、北畠親房の著に成れる『神皇正統記』中にも『昔は日本は三韓と同種なりといふ事のありし、彼の桓武の御代に

燒け捨てられしなり云々』と見ね、又た朝鮮に於ても同樣の說あり
しことは『續日本紀』に依れば、高麗王の朝廷に奉りし文の中に、
『族是兄弟、義則君臣』といへる句のありしに徵しても明かである
之を體質、言語、及び風俗上より見ても、日本人と韓人の同種なること
は疑が無い、荻野由之氏は韓人の風俗を見て、我國の平安朝時代の風
俗に類似するものゝ多きことを示摘せられたが、言語に於ても日韓
兩語に相類似する者多く、兩語共にウラルアルタイック系に屬する
ことは夙に言語學者の論定せし處である、又た體質に於ては、韓人は
身長の割合に高く、頭形は概して亞廣頭(生體指數八二、三)であり、鬚髯
及び體毛は一般に少い、日本人は身長概して低く、體毛及び鬚髯に富
める者も多い點に於て、多少韓人と異つてゐる處もあるが、併し日本
民族には『アイヌ』の血液の混合せるもの尠からず、又た印度支那
族、印度ネジアン族の血液を稟けたるものも尠くない、故、毛髮及び身

長の點に於て韓人と相違せる處のあるのも決して怪しむに足らぬ。

抑々韓國は三韓といつて元來は辰韓、辨韓、馬韓に分れ、其後、それが新羅、百濟、高麗の三國となつて朝鮮半島を分領した、而て其の區域は高麗は北西方にありて平壤以西を領し、新羅は東南に在りて今日の慶尙道の慶州を都となし、日本と對岸の地に居り、百濟は中程にありて漢城近傍から其の東南を占めてゐた、而て新羅、高麗、百濟共に同種の扶餘族であつて、即ち滿州から南下せし扶餘族の一部は、朝鮮の北部に高麗國を建設し、他の一部は更に南方に進んで百濟國を建てた、新羅に至ては漢書『北史』の所説に依れば、百濟の王が海より遁れて新羅に入りて其の國の王となつたものであるが、併し新羅は之より前に辰韓或は秦韓と呼ばれてゐた國の一部で、辰韓には漢民族たる秦人の移住したものが多かつた、それは『魏志』に『辰韓在馬韓之東、共者老世自言、古之人避秦役、來適韓國(中略)今有名之爲秦韓者』と

あるに徴して明かであるが、新羅は實に辰韓十二國中の一なる新羅國から起つたものに外ならぬ、それ故、新羅は他の高麗、百濟と同様に滿州から南下せし扶餘族ではあるが、韓民族が之に混合してゐた。日本民族も既に論ぜしが如く、滿蒙地方より起りたる種族であつて韓國を建設せし扶餘族と同種である、加之、上古時代より日本民族と韓民族との相往來せしことは史上顯著なる事實であつて、素盞鳴命五十猛命が朝鮮に往來し、天孫瓊々杵命が韓國に交通するに便なる吾多の地に奠都したりといへる古傳說もあり、又た韓民族よりは吾國に渡來歸化せし者甚だ多く『新選姓氏錄』に記する處に依れば韓國より歸化して日本人となりたる畿內の名家の數は實に百九十四家に達してゐる、此の如く日韓兩民族は其の祖先に於て全く同種なるのみならず、有史時代以後に於ても彼我相交通して其の血液的關係は益々濃厚となつた、殊に信濃國の如きは一時韓人の子孫にて

充たされたことがあつた位で、篠井、村上、御井笠の如き、いづれも韓人系である、而て韓人の中にも我國に歸化せるもの丶最も多かりしは百濟人であつて、今日猶ほ世に殘れる百濟村、百濟鄕の如き地名は、往昔百濟人の住みし處である、又た日本人にして往昔韓國に移住歸化せし者も可なり多く、其中には韓國の官吏となり或は奴婢となつた者もあつた、史家の說に依れば慶尙道一道のみにても一時歸化日本人の數は二千に達したといふ。

韓國の古俗が日本の古俗に類似せることは顯著なる事實であつて『後漢書』東夷傳に於る所說等に徵するに、死者あれば舊宅を棄て丶新居を造るの風ありしが如きは恰も我國の古代に於ける奧津棄戸の俗に類似してゐる、又た馬韓に於ては、常に五月を以て田植をなし、鬼神を祭りて晝夜宴舞し、十月農功を終るが如き風は、我國の田植祝、新嘗祭等に似てゐる、又た大木を建て丶鈴鼓を之に懸け鬼神に事

ふるが如き風は神前に眞榊を用ひて神を拜するに類し、又た諸國の各邑各一人を以て神を祭るを主らしめ號して天君といふが如きは我國の諸地に於て産土神を祭るの俗に類してゐる、此の如く其の風俗の相類似せることも亦た日韓兩民族が其の祖を同ふすることを示すものである。

抑々朝鮮の起源は頗る古るいことで支那の周の時代の初めに、殷の箕子が韓國に入りて國を建設した、併し箕子の據つた地面は韓國の北半と、遼東の一部とに過ぎなかつた、箕子の朝鮮が、矢張り支那人なる衛滿氏のために亡ぼされて衛氏の朝鮮となつた、此の如く朝鮮は太古より支那、民族の移住して且つ其の統治者となつたのであるが漢の武帝の時代に至り朝鮮は漢のために亡ぼされて支那の版圖に入つてより、支那人の移住する者も多くなつた、然るに三國の末から晋の初になつて、支那の國力の漸次衰へてより、滿州方面に住めるツ

ングース族たる扶餘族が韓國の北部に進入して先づ鴨綠江の地に王國を建てた、高麗が即ち是れである、而て其の一派は更に南下して百濟國を建てた、即ち馬族の中の一國である、新羅は秦韓中の一國より起つたもので『北史』の記する處に依れば新羅の王は元と百濟人であつて、海より遁れて新族に入り王となつたとあるから、新羅も他の高麗及び百濟同樣に扶餘族である、但し新羅の古國たる秦羅は太古時代より支那民族の住居し、古傳說に、秦の役を避けて遁れきた秦人とあるから、支那民族の分布の甚だ多かつたことは容易に推知し得られるのである。

以上說くが如く韓民族は支那から渡來せし漢種族、滿州方面より進入せし扶餘族とを主體として混成せられたる種族である、而て我が大和民族も亦た扶餘族より起つたものであることは前旣に述べて置いた通りである。

（十二）總　括

以上說き去り說き來つた處を綜括すると次の如くである。我日本島には有史時代以前より『アイヌ』族と所謂彌生式種族とが先住してゐた『アイヌ』は卽ち蝦夷であつて、有史以前には南は琉球より北は奥羽に至る迄汎く分布せし種族であるが、唯だ北九州だけには住んでゐなかつたらしい、それは今に至るも北九州には、『アイヌ』の遺物遺蹟と認むべきものが發見せられないからである、而て此の『アイヌ』種族は恐くは太平洋諸島から海を航して北進して日本島に移入したものらしく、其の最初の上陸地は琉球、南九州であつた、それより山陽、山陰、畿內にも進入し、更に東國に進みて繁殖した、又た彌生式種族なる者は矢張り南洋方面から日本島に移入せるものと認むべきで、史上に見ゆる熊襲、隼人、土蜘蛛、國栖などいへ

る蠻族の大部分は蓋し彌生式種族に屬せるものである、此等の種族は九州全島、山陰、山陽、畿內及び附近の諸國に棲住してゐた思ふに此等の種族は之を人種學的に觀察すれば、印度ネジアンに屬するものもあり、印度支那族に屬する者もあり、又たネグリトーに屬する者もあらう、熊襲、隼人の如きは蓋し印度ネジアン族と看做すべきものであらう。現在臺灣に住める生蕃と其の系統を一にせるものである、土蜘蛛の中には印度ネジアン族もあつたらしい、又たネグリトーも在つたであらう、北九州に住めし海人は思ふに印度支那族でなからうかと思はれる。

『アイヌ』族、彌生式種族いづれの方が最初の先住民族であるかといふことに就ては、多數の學者は『アイヌ』を以て最初の先住民族と認めてゐるが、併し茲に注意せねばならぬのは、前記の如く『アイヌ』の遺物遺蹟が北九州に於て發見せられないことである、此の事

實に就ては既に中山平次郎氏も論ぜられた處で、思ふに北九州には『アイヌ』の日本島に入り來る前より既に彌生式種族の棲住して悉皆の地域を占領してゐたらしい、されぱこそ『アイヌ』は九州南部には住んでゐたけれども、北部には進入する機會を得ず、其の大部分は更に海を航して北東に向ひ、其の途次、山陽、畿內、紀伊等の諸地方に幾分かの上陸者を留め、當時殆ど無人の鄉なりし關東地方に到達して此處に始めて安住の地を發見し繁殖するに至つたのであらう、要するに日本島には『アイヌ』と彌生式種族との先住種族があつて全島に繁殖してゐたのを、其後、東北亞細亞大陸から朝鮮を經て日本島に移住せる滿蒙民族が其の優秀なる知力と武力とを以て次第に上記の先住種族を征討し或は同化して遂に日本國を統一したのが即ち大和民族、一に天孫民族と稱せらるゝもので、即ち日本民族の幹部である。

さりながら大和民族は元來東北亞細亞大陸に住みし游牧民族であつて、漢人よりは夙に北狄と蔑視せられし匈奴、鮮卑、烏垣、女眞等と其の祖を等くせるものであつた、固より其の武力と知力とに於ては先住種族を征服し同化することは出來たが、併し其の文化に至ては頗る低劣なるものであつた、されば建國以後は韓國を經て支那の文明を輸入するの方針を執り、韓國よりは吾國に移住する者が多くなつて日本の文化を形成したのである、さり乍ら其の其の衣食住に至ては、先住種族たる彌生式民族の風習に倣つた者が尠く無い、先づ家屋の原始的建築を見ても南洋の家屋と殆ど同樣であつて、其の合掌建であり、千木、葛緒木を載せるなどは南洋土人の家の建方と異つてゐない、又た主食物を米とせることも南洋風であることは固より言ふ迄もない、それから、上古時代の日本人が頸に裝飾を施し、又た今に至るも犢鼻褌をつけるが如き風習のあるのも亦た南洋の風俗其のま

ゝである、但し言語に至てはウラルアルタイック系であつて、卽ち大和民族の故鄕の言葉を一般に普及せしめたのである。

建國以來、韓民族の日本に移住するの外に、漢民族も澤山移入し來つて日本國民と同化した、韓民族は大和民族と其の祖を一にし其の族を同じうする者であるが、漢民族は全く大和民族と其の種を異にし其の種を異にせる者である、然るに漢民族の血液は上古時代より日本國民の血管內に流入し、骨肉の關係の成立するやうになつた、其他南方支那種族たる苗族、卽ち吳越人種と其の系統を一にせる民族も日本島內に入り來りて國民の一部分を形成した。

されば日本民族と云ふも決して單純なるもので無く、種々の種族の混血より成る雜種民族である、而て其の血液配合量の多寡に從つて其の容貌體質に區別があり、其の祖先の何たるかを示してゐる、顏の長く鬚髯粗にして顴骨突出せず、鼻梁高く頭髮普通なるものは大和

民族の血液の濃厚なるもので畿內を中心として其の附近の諸國に最も多く分布してゐる、古昔より名門貴族は此の種族である、併し又た漢民族の血液の混合せる者も尠く無い、之に反して顏面短く、鼻低く、口大にして唇厚く、鬚髯に乏しく、顴骨の突出せるものは、印度ネジアン、印度支那族等廣義の馬來民族の血液の濃厚なるもので、上古時代に於ける熊襲、隼人、海人、土蜘蛛等の面影を留むるものと認むべき者である、此の種族は九州、中國より東海に亙り漁民農民に多く認められる、それから顏長からず、眉毛濃密にして眼窩凹み、鼻稍高く、鬚髯體毛の密生せるものは疑も無く、アイヌ種族の血液の濃厚なるものである、此の他、頭髮の著るしく卷縮し或は色の甚だ黑い者はネグリトー種族の血統を傳へたものと認むべく又た身長低くして眉毛の濃く其の尾端の下がつてゐるが如き者は苗族の血液を禀けたるものである。

日本民族
- （一）北蒙古種族（ツングース族）——大和民族
- （二）印度ネジアン族——襲熊、隼人
- （三）印度支那——土蜘蛛、海人
- （四）ネグリトー族——國栖、肥人
- （五）漢民族
- （六）苗族
- （七）アイヌ族——蝦夷

（十三）祖先の面影

日本人は以上概述せしが如く、種々なる種族の混血より成れる雜種民族であつて、啻に其の容貌體格に於てのみならず、其の特性、思想、風俗等の點に於てもそれ〴〵祖先の面影を傳つてゐる、今此の點に就て少し許り私の見る所を述べてみやう。

(イ) 日本人の勇武

上古時代より日本人が勇武慓悍であつて中外に武威を輝かしたことは神功皇后の三韓征伐を始めとし倭寇の支那沿岸侵掠、豊閤の征明の壯擧等より近くは日清日露の二大戰役に至る迄、史上に顯著なる事實である、之を人種學上より論ずれば、是れ畢竟日本人がいづれも勇敢剛健なる諸民族の混血より成れる民族であるが爲めであつて、卽ち日本民族の中心たり幹部たる大和民族は實に匈奴、烏垣、鮮卑女眞等と其の種族を同うし或は其の近親たるツングース種族で、此等の民族が支那史に於て勇悍强猛なる戰士として漢民族を畏怖せしめたることは周知の事實である、而て大和民族に同化せし『アイヌ』(蝦夷)『隼人』も共に强勇慓悍なる種族で其の早くも大和朝廷に歸順せし者は天皇の親兵となり、宮闕護衛の任に當る佐伯部、久米

部となつた、されば日本人が古來勇武好戰の民族として其の武威を發揮したのも決して偶然で無く、其の祖先の遺傳に基づくのである支那史に明かなるが如く、夙に漢民族の强敵として最も畏怖せられたる種族は實に匈奴(今の蒙古)であつた、秦の始皇帝の如き猛勇の王者さへ、匈奴の侵掠を恐れて萬里の長城を築き、漢の高祖の如き英雄も匈奴と和約するの已むなきに至つた程、彼等は勇悍なる馬上の雄者であつた、其の便服を着、騎射に長じ、士馬精强を以て自ら雄なりし彼等は屢々支那民族を脅かせしのみならず、月氏國安息國等をも震駭せしめた、彼等は固より北狄と稱せられたる游牧民族であり『匈奴傳』にあるが如く、畜牧射獵して肉食生活をなし、唯だ兵に習練して四隣を侵略せし慓悍なる好戰的民族であつて、刀戈騎射の道にかけては恰も帝政時代の露國に於けるコサック騎兵が馬上に長槍を揮つて奮戰健鬪し、歐洲を畏怖せしめた如くに此の武力を發揮した

ものである、彼等は野蠻暴戾の寇賊的民族のやうに看做されてゐたけれども、彼の石勒が『大丈夫の世にあるや、磊々落々として日月の皓然たるが如くなるべし』と云つた如く、其の尙武の氣象、天眞爛熳の性格は彼等の特性であつて、陰險狡猾なる種族では無かつたのである、加之、其の然諾を重んじ個人的利害を忘れ、難あれば爭ひて之に赴き、命あれば艱難も亦た辭せず、克己自制の念に強く統御服從の美德に長せしことは實に彼等の特色であつた、此の如きは固より匈奴ばかりで無い、鮮卑、烏垣、遼、金、元等の諸族も亦た同樣であつていづれも弓矢を重んじ、戰場の勇者たるを以て誇りとする質實克己の尙武的民族であつた、彼等の中より、鐵木眞、成吉思汗、帖木兒等の如き世界的英雄を出だしたのも決して偶然で無い、而て我が日本民族の中心たる大和民族は人種學上上記の强勇剛健なる諸種族と近親の關係を有するものである、日本民族が上古以來弓矢を重んじ、武力に長せ

る尙武的國民なりしことは畢竟其の祖先の遺傳的特質に外ならぬのである。

然るに勇悍强健なる大和民族も奈良朝時代以降、漢土の文明に心醉してより文弱の風に陷りて進取の氣象を失つて了つた、それは恰かも馬上の雄者たりし蒙古滿州の民族も一たび支那を征服して洛陽に都するに至るや、其の固有の風俗を棄てゝ漢人の風俗を學び、其の文化に醉つて次第に質實剛健の氣風を失ふに至つたのと同樣である、此の如くにして金も元も淸も亡滅の悲境に陷つた、若し我が國に於ても『アイヌ』の後裔たる東國の武士が大和民族に代つて政權武權を掌握しなかつたならば我が日本國も或は夙に平安朝時代の頃に於て衰滅したかも知れなかつた、幸ひにして武勇を以て世に顯はれたる質素撲直の東國武士が文弱に陷りし大和民族に代つて日本を統治するに至つたが爲め、我國は衰滅の運命より免れ剛健質實

なる國家組織の下に日本民族を統制することが出來たのである、吾人は此點に於て『アイヌ』の血液を混ぜる東國人所謂『あづま夷』の出たる武士に對して深く感謝しなければならない。

『アイヌ』は野蠻なる先住種族として屢々大和民族に反抗したものであるが、併し其の之と同化融合して朝廷の親兵となり、又た貴神の從者となりし者は勇武忠實なる武士として國家のために屢々大なる効勳を奏した、『アイヌ』の裔たる東方諸國の住人は大和民族より『あづま夷』と蔑視せられてゐたけれども其の勇武強健なるが爲め彼等は古くより京師に召し出だされて朝廷貴神の護衛に役せられ、或は遠く九州に派遣せられて海防の任に當つた、彼等が如何に進むことを知つて退くを知らざりし勇健の闘士戰士なりしかは、聖武天皇が東國人を以て禁衛隊を編成せられし時の詔勅に徴しても明かである、曰く朕が東人に太刀を授けて侍はしむることは汝の近

き護りとして護らしめんと思ひてなり、此の東人は常に曰く、額に矢は立つとも背には矢は立てじと云ひて、君を一つ心を以て守るものぞ云々とある、又た東國人を以て九州海岸防禦のために、防人に任じ遠く九州に派遣せられしも其の武勇なりしが爲めであつた、『萬葉集』には防人が九州に赴く時、妻子と別離するを悲しみて詠んだ和歌が收載されてある、此の如く東國人は奈良朝時代より勇武忠實なる兵士として世に認められてゐたが、平安朝時代の末葉頃から東國の野に戰鬪を專門とする武士なる特殊の階級が起りて次第に勢力を張り源平二氏統率の下に立つに至つたが、遂に平安朝時代の末になつて朝廷に代りて武門政治を行ひ爾來、明治維新に至る迄凡そ七百餘年の久しきの間、封建制度の確立して武士が天下の權力を掌握してゐた、我國が建國以來極東の海島にありて毫も外國の侮を受けず、尺寸の地を失はず强固なる國家を組織して武威を中外に輝かす

ことの出來たのも勇武剛健質實素樸なる祖先の遺傳の賜である。
啻に東國人ばかりで無く、九州人も夙に武勇を以て世に聞ゑたもの である、殊に薩摩男兒の慓悍なることは最も能く世に知られ彼の賴山 陽の薩摩の健兒を謠ひたる詩『衣至骭袖至腕、腰間秋水鐵可斷、人觸 斬人馬觸斬馬』の如きは實に彼等の面目特色を發揮したもので、薩 摩武士の古來より戰國武士の元氣を有し、慓悍決死の奮勇を以て他 國人を驚かしたことは周知の事實である、此の如きは畢竟強猛精悍 なる印度ネジアン族の血液を禀けてゐるからで、上古時代より南九 州に勢力を張りし隼人族は實に大和朝廷の一敵國として畏怖せら れたる奮勇健鬪の猛者であつた、されば彼等の中大和朝廷に歸順せ るものは、所謂久米部として宮闕護衛の兵士に採用せられ、又た貴神 の從者に任ぜられた者である、古來より薩摩人が薩摩隼人の名ある 所以のものは、隼人族の後裔であるからで、其の勇武剛健を以て世に

聞ねしことも決して偶然で無い、西南戰役に於て薩摩武士の表はしたる勇氣は如何にも驚くべきもので、當時外山正一氏の作られたる拔刀隊の歌に『敵の大將たるものは古今無双の英雄ぞ、之に從ふつはものは、共に慓悍決死の士』とあるが如く、其の遠祖たる印度ネジアン族の遺傳なる精悍强勇は大に官軍を惱やませ、纎弱なる婦人に至るまでも男子に伍して戰場に驅逐し彈煙硝霧の間を往來して官軍に當つた程である。

是を要するに我が日本民族は北狄として漢民族に畏怖せられたる勇武精悍のツングース族と其の種を一にする大和民族を中心とし剛健猛勇なる『アイヌ』の血液を禀けたる東國種族、慓悍奮鬪の隼人族の後裔たる九州種族等より成れるものであるから、古來尙武の國として海外諸國に對峙し國威を發揮したのも決して偶然でなく其の由來實に久しいものがある、我が日本民族は其の遺傳より見て

も好戰侵掠的の民族と謂はなければならない。

（ロ）現實的功利的なる日本民族

我が大和民族と其の系統を同うする東胡遼、金、元、清等の民族はいづれも自然の恩惠の少い荒漠冱寒の東北亞細亞、中央亞細亞若くは北支那に住みし未開の游牧民族であつた、併し彼等は武勇に長ぜると共に政治的才能に富み、武力と政才を以て屢々漢民族を壓倒し天下を統一したことのある民族である、彼等は漢民族の如き哲學的文學的の人間では無かつた、抽象的眞理の研究に耽るが如き人間では無かつた、彼等は唯だ現實主義功利主義の人間であり、力と名とを尙び人民である、地理學者アルノルド、ドギヨーが『蒙古人種の特性は實益功利を見るに敏なるも未だ形而上的眞理の攻究に及ばず』といつたのは、惜かに彼等の特性を道破した言である、而て這般の性質は亦

た我が大和民族に於ても明らかに現はれてゐる。

我國民は人の知るが如く實際的であつて理性的でない經驗的であつて思索的でない、科學的であつて哲學的でない、我國民よりは未だ漢人の老子莊子を出だし、程朱、王陽明、陸象山等を出だした樣な事實を示さない、這般の事實は啻に學術上に於てのみならず、亦た宗敎の方面に於ても亦た能く認めることが出來る、我が國民は現實の利益幸福のために宗敎に歸依し、神佛に祈願するに過ぎない、匈奴の天を拜し、女眞の天地を祭つたのと其情に於ては殆ど同樣である、されば高遠幽玄の哲理を含蓄する印度の佛敎も一たび我が日本に來ては全然現實的功利的宗敎に變化した、看よ平安朝時代以來、天臺、眞言の如き宗派の盛んに行はれたのは三觀十乘の止觀業、六大回曼といふやうな高遠の哲理に由るのでは無く、加持祈禱の如き現實的利益が國民の思潮に投じたからである、之に反して佛敎中最も深遠なる哲

學を有する華嚴宗の萎靡不振に終り殆ど消滅同様の狀態に陷つて了つたのは其の教理に現實的要素を缺いてゐる故である、人の知るが如く、我國の宗教家中哲學的思索の最も深遠なりしは空海であるが、而かも其の創唱せし眞言秘密教の世界觀が頗る現實主義の傾向を有し『卽事而眞、當相卽道』などゝ唱へ靈驗によつて人心を收攬せしが如き、最も顯著なる事實である、又た之を儒學に徵しても、彼の宗儒の形而上哲學たる理氣說も我國の儒者によつて甚しく現實化せられ、林羅山の如き朱子學者と雖現象を超越する本體、卽ち理の獨在を認めずして理と氣との分つべからざるを唱へ、所謂理氣合一の一元論を主張した程である、而て宗儒の說に反對せる伊藤仁齋の如きは『天地の間一元氣あるのみ』と主唱し、又た中江岷江などに至ては遂に『理なるもの本と之れ無し』を唱破した、又た宗儒の學は之を哲學としてよりも寧ろ大義名分を敎ゆる所の實際的經世の學

問として學者間に尊重せられたのである、荻生徂徠に至ては全然形而上的抽象的思索を排し、道は天地自然に存するものに非ずして聖人の作爲せる所なりと主張し、一種の經驗論を樹立せしことは周知の事實である。

此の如く現實的經驗的なる日本民族の思想は印度及び支那の形而上哲學を其儘繼承すること能はず、之を實際化して了つた是れ我が國民の元來科學的現實的の人間にして哲學的理想的の人民に非るの證據である、古今を通じて未だ嘗て我國に深玄なる哲學の出でないのは決して偶然でない、從つて將來と雖、此の如き民族の中から大思想家大學者の出づべき筈は無い、何となれば世界の思潮を支配すべき獨創の學說は哲學的思索に待たねばならぬからである、之を要するに我が日本民族の有爲有望なる民族たるにも拘はらず、今日に至る迄未だ一人の老莊を出ださず、程朱を出ださず、王陽明を出ださ

ず、學問に於ても將た宗教等に於ても何等世界に誇るに足るべき貢献をなし得ないのは其の祖先の特質の遺傳が大に與つて力ありと謂はなければならぬ。

(八) 日本民族の長所

大和民族の祖先と同種或は近親の關係にある匈奴も、鮮卑も、島垣も遼も、金も、蒙古も、其の君主に對しては崇高なる宗教的崇拜の觀念を有つてゐた、彼等は其の君主を以て、天より出でたる神裔なりと信じ衷心より之を尊敬した、我が大和民族が、皇祖皇室に對する觀念も亦た同樣である、日本人の尊皇心は實に其の遠祖たる東亞大陸諸種族の遺傳と云つても可い、天皇と皇族とは神胤にして人間の種にあらず朝敵となるものは忽ち神罰を蒙むりて必ず敗るべき運命に陷るとは上古時代より今日に至る迄、日本民族に通有せる一種の歷史的

信仰である、昔者、西行法師の伊勢大廟に賽し『何事のおはしますかば知らねども忝さに涙こぼるゝ』と詠んだ和歌は實に日本人の尊皇思想を的確に言ひ表はした者である。

支那史上誰も知つてゐる通り、漢人は其の君主を變へることを何とも思はず、盜賊の徒でも力のありさへすれば帝位に就くことが出來る、此の點に於て漢民族は『王侯將相何ぞ種あらんや』といふ抽象的平等主義の信者であり實行者である、之に反して匈奴、遼、金、元の民族は前記の如く、君主を以て人間とは全く其の種を異にせる神聖無比の天孫なりと信じ、從つて君主の血統の純潔なるを重んずる處から、後妃は一定の貴族高姓の中より選出した、我國に於ても、累代天皇に配する皇后妃嬪は必ずや貴顯名門の出である、此の如き事實も大和民族の祖先の遺風と認むべきものであつて、漢人とは全然其の面目風習を異にせる顯著の事實である。

日本人が皇室を中心として强固なる國家を組織し、政治に、武力に、其の才能を發揮して二千六百年の獨立を維持し來りしのみならず、國運益々發展の機運に向ひつゝあるのは、其の祖先より受けたる特質特色の遺傳の然らしむる處で、之を彼の漢人の文弱無氣力にして而かも徒らに議論倒れに終らんとするが如き腑甲斐なき狀態に比すれば實に雲泥の差異がある、文學と哲學とを有する漢人は吾人の祖先と近親同種の東亞中亞大陸の諸民族を以て北狄と侮蔑したが、何ぞ知らん其の所謂『北狄』こそは啻に勇戰健鬪の馬上の雄者たりしのみならず、政治的統御の才能に富み尊皇の念最も深き篤實素樸の民族であつたのである、不幸にして彼等は漢人の文化に接觸し之に心醉して固有の美質を棄てたるが爲め遂に漢人同樣の文弱なる民族に變化して了つたが、唯だ獨り彼等と近親關係なる日本民族のみは極東に島帝國を樹立して光榮ある進步を遂げ今や世界列强の

伍作に列して東亞の覇權を握るに至つた、吾人日本人は此の點に於て寧ろ『北狄』と其の種を一にせることを誇りとするものである

（三）日本に於ける陰陽崇拜

吾國に於ては古來男女の生殖器の形像を崇拜の對象として祀れる淫祠多く、就中、關東から奥羽にかけて甚だ盛んである、常陸地方にては道鏡宮、上野にては赤堀藥師の小祠、野州には金精稻荷、信州にては刈田大明神、奥州にては金精又たは岐の神若くは道祖神の名を以て祀られてある、其他幸の神、道陸神、陰陽石明神等の名の下に祀らるゝ者も同じく生殖器の刻像である、それから道祖神の變體ともいふべき後世の大聖歡喜天に二股大根を供へて女陰を供ふるの意にあつるが如き、或は女陰を玉門といひお開帳、春宮と稱するが如きいづれも陰陽崇拜の遺習と見るべきもので、又た十六夜の月待、盆踊、村の鎮

守の宵祭等に男女相交つて徹夜するのを神に對する敬禮の如くに心得てゐるが如きも、交媾を神聖視する迷信の餘風である。

吾國に於て陰陽崇拜の風習が夙に上古時代より行はれたことは、『古語拾遺』の中に陰莖の形を模造して蝗害を防いだといふ記事があり『宜以牛宍置溝口作男莖形以加之』とあるを見ても知ることが出來る、但し之を以て一の傳說と看做しても、既に古るくより生殖器崇拜の迷信の行はれてゐたことを推知し得られる、而て平安朝時代に至りては生殖器の像を刻して神を祭るやうになり、之を岐神(ちまたの神)と稱して崇拜した『扶桑略記』の天慶二年の條に『近日東西兩京大小路衢、作木作神、相對安置、凡厥體像、髣髴丈夫、頭上加冠鬢邊垂纓、以丹塗身、成緋衫色(中略)或所作女形、對丈夫而立之、臍下腰底刻繪陰陽、搆凡案於其前、置杯器其上、兒童猥雜拜禮、段懃捧幣帛、或供香華號曰岐神』とある。

古來關東より奥羽にかけて生殖器を神體とせる淫祠の頗る多いことは顯著なる事實であつて、新井白石の『紳書』橘南谿の『東游記』喜多村信節の『嬉游笑覧』菊岡沾凉の『本朝俗諺志』等の古書を始め、姉崎正治氏の『中奥民間の信仰』加藤咄堂氏の『日本風俗志』等の記事に徴しても明白である、而て其の生殖器神は所謂道祖神、岐神、金精大明神等の如き神名を附せられてゐる、此の如く關東奥州に於て、古來生殖器崇拜の風習の盛んなることを見ると、此の風習は或は『アイヌ』より起つた者では無からうかとの考が浮んでくる、藤原相之助氏は『先住民俗史』に於て生殖器神を『くなど』の神といふのは、アイヌ語の『クンネ』(暗黑、夜の義)の轉訛したものであり又た生殖器の神體を一に、さぐぢ神(佐具叡)神といふのはアイヌ語の女子生殖器を『サンゲアパ』と稱するのより轉訛したものであつて、畢竟生殖器崇拜の風は先住民族たる『アイヌ』の遺風と認むべ

く日本民族の發展して、アイヌの之に同化するに伴ひ、原始の生殖器崇拜の意義に變化を來たして遂に日本的となり、道祖神、金精大明神等といふが如き名稱に改まつたものであらうと論ぜられた。

さり乍ら『アイヌ』に生殖器崇拜の風の全く無いことは蝦夷の事に精通せる金田一京助氏の言明せる處であるから、我國に於ける陰陽崇拜の俗を以て直ちに『アイヌ』に出でたものは肯定し得られない、思ふに古來陰陽崇拜の風が主に東國奥羽に盛んに行はれてゐるのは蓋し東北地方には多くの舊風の殘存してゐるからでは在るまい歟、元來東北は古來交通不便にして、其の統治者は中央各地に於けるが如く更迭すること多からず、土着の豪族も舊風を維持して文化の開發進步甚だ遲々たりし結果、一たび東北地方に入りたる風習は比較的變化を受くること少く、中央には旣に廢絶に歸せし風習も尙ほ此の地方にては殘留して居る者も尠くないのである（『日本風

俗志參照』）されば兼好法師の『徒然草』にも、都には無くなりし風俗の東國の地に尙ほ殘れることを記して『亡き人の來る夜とて魂祭るわざは此頃都には無きを東の方にては尙は爲ることにて在りしこそあはれなりしか』とある、是に由て之を見れば、今猶ほ東國に行はるゝ、陰陽崇拜も嘗ては都地及び他國に行はれしものであつてそれが一たび東國に進入した後は比較的變化を受くること無くして其の儘に殘存してゐるのでは無からうかとも思はれる此く觀察してみると陰陽崇拜の風は『アイヌ』の遺風と看做す譯にはゆかない、又たアイヌ語の中に生殖器神名に類似する言葉のあるにしてもそれは暗合偶合と言はれぬことも無い。

然らば吾國に於ける陰陽崇拜の起源如何といふに、私は南洋に由來するものであらうと思ふ、前記の如く吾國の上古時代に於て陰莖の形を作つて蝗害を防いだといふが如き風習は南洋ボルネオ島の蠻

族間にも夙に行はれ、惡魔或は疫病を防ぐが爲めに、男女の生殖器關の像を立てゝ置くのである和蘭の學者ニューウェンフースの著、『ホルネオ旅行記』を見るに、此地の土人は生殖器其者は惡魔を畏怖せしむるものであるから、木を切つて其の形を刻み、之を階段若くは橋の上に持つてきて惡魔を追ひ拂ふの用となすことが書いてある、我國の先住民族の中には南洋より移入したる種族も尠く無いのであるから、生殖器崇拜の原始的風習は恐くは南洋傳來のものであらう。

併し吾國に於ける陰陽崇拜の風習は有史以來に至り佛敎に附隨して輸入せられし印度思想によりて助成せられたやうである、印度に於ては太古より生殖器崇拜の風汎く行はれ、今日にても尙ほ男根は崇拜の對象となつてゐる、印度にては陰莖を『リンガム』と稱し、寺院殿堂には怖ろし程大きな陰莖の形像が具へつけられ、又た信者は

宗敎上の裝飾具として小さな形の陰莖を頸にかけてゐる、又た寺院内には屢々男女兩陰の相結合せる彫像が見受けられる、それは女陰の形を模した石製の盆の中央に『リンガム』を立たしめた者であるが、此の如く男女生殖器を結合せしめたものは、之を Pulleiar といつて生殖力增强の表象とする、此の如く陰陽崇拜の風盛んなる印度の風習は佛敎と共に吾國に輸入せられたが、特に佛敎中の眞言密宗は此の風習の傳播を著るしく助成したものである、眞言密宗では天地萬象を金剛界と胎藏界との二部に分ち、之を理智の二者を代表するものなりとし、更に之を男女兩性に配し、男は決斷力の智あるが故に金剛界の德を具へ、女は靜の德あるが故に胎藏界の德を有すと說き理智の冥合と男女の結合とを同視し、交接を以て即身成佛の秘術であるなど〻唱へ出し、『瑜珈行品』中の『男女二根相交會する時五塵大佛事を成す』とあるといふのを引證して生殖器崇拜の俗を助

長せしめたのである、此の如きは立川流の眞言に於て說く處でそれは前記の印度思想の他に、尙ほ支那の一部の道敎者に於ける生殖器崇拜の思想をも加味したものである、例之ば張道陵の黃書には金莖玉池等の語を以て男女の生殖器を言ひ表はし、大極分れて陰陽の兩儀となり、兩儀四象を生ずるのであるから、陰陽は則ち男女、男女の交合は則ち陰陽の和合なりと說いてゐる、又た吾國の神代史に於ては諸冊の男女二神が始めて交接の道を知り諸神を生んだとの神話があるが、これも亦た陰陽崇拜の風習を助成したものである、此の如く佛敎、道敎、神道の迷信が相混和して陰陽、和合乾坤和合の理を唱へた結果益々生殖器崇拜の思想を確立するやうになつた。

思ふに吾國に於ける原始的陰陽崇拜の風は其の最初は南洋より移入せる先住民族によつて傳へられたものであるが、其後、佛敎の輸入と共に之に附隨せる印度思想中の生殖器崇拜の觀念も次第に世に

弘まり、平安朝時代に至りては既に生殖器を神體として拜禮するが如き風習も起つてきたのである、而て這般の風習の一たび、日本の中央及び西部から東國地方に入つた後は前既に說明したるが如き事情の下に久しく東國地方に殘存し、今に至るも尙ほ之を舊風として留めてゐるのである。

（ホ）日本の民俗的風習たる陰莖龜頭の裸出と犢鼻褌

歐米人は人體解剖圖を見ても分かる通り其の陰莖龜頭の大部分は包皮にて掩はれてゐるが、之に反して日本人に於ては龜頭が裸出してゐる、我國では包莖を『皮かぶり』『すぼけ』などゝ云つて之を恥ぢ之を嫌ふ風習があり、從つて少年時代より機械的に包皮を下方に牽退せしめて龜頭を裸出するやうにするのである、此の如き民族的風

習の淵源に就ては、割禮即ち男兒に於ける包皮切斷の遺風ではあるまい乎との考へが浮ぶ然るに我が國の古史及び古記錄に徵するに包皮切斷の風習の行はれたるが如き事實をば明らかに突きとめる事が出來ない、さり乍ら私の考に依れば、有史以前の時代に南洋諸島より吾國に移入せし先住民族には包皮切斷の風習があり、その遺風として龜頭を裸出する慣習が成立したのであらうと思ふ、されば之に就て少し許り私の見る所を記述することにした。

抑々幼兒の包皮を切斷する風習は一の宗敎的儀式として今に至るも猶ほ猶太敎、回々敎の信者間に行はれてゐる、而て此の風習の初めて宗敎的儀式となつて猶太人に行はるゝやうになつたのは猶太人の祖先とも云ふべきアブラハムを嚆矢とする、『創世記』第十七章に『汝等中の男子は皆割禮を受くべし』といひ『汝等其の陽の皮を割くべし、是れ我と汝等の間の契約の徵なり』とある、これは固よ

り傳說に違ひないが、併し割禮の風習の猶太人に行はるゝことゝなつたのは、猶太人が四百三十年の久しき間埃及に滯在してゐた時埃及人より之を學んだ結果であつて最初から猶太人間に行はれたのでは無い、ヘロドットの說に據れば埃及に於ては有史以前の時代から包皮切斷の行はれてゐたと云ひ、又たハルトマンの說では此の風習は亞弗利加より起りて亞細亞人に傳へたもので、それは先づ亞弗利加人の黑人種に行はれたる幼兒の包皮切斷の風が太古の埃及人に波及し、更に其の媒介によりて猶太人及び回々敎徒に傳へられたのであると云つた、蓋し埃及に於て上古時代より包皮切斷の汎く行はれてゐた事は夙に解剖學者及び最初の人類學者たるブルーメンバッハの證明せしが如く古代埃及人の『ミーラ』には明かに包皮割損の痕跡の存するのを見ても明白である、而て有名なる埃及研究家のエーベルスは基督紀元前千六百十四年乃至千五百五十五年代

に生存せし一軍人の『ミーラ』の陰莖を得、之をハルレーの解剖學者ウェルケルに示せしに、全く包皮の痕跡をも認めなかつたと云ふから、埃及に於ける包皮切斷の風習は既に紀元前十六世紀の頃に於ても行はれてゐたことが明かである。

太古の埃及人及び猶太人に行はれし幼兒包皮切斷が如何なる方法の下に施行せられしかは明かでないが、石製の刀を以て切斷したことだけは聖書の記事に徵して明瞭である、是に由て之を觀れば、包皮切斷の風習が石器時代より行はれたことは容易に想察し得られる處で、蓋し石製の刀を以て包皮を切斷したのは要するに石器時代に行はれた風習の名殘りに違ひない、併し其後になつて硝子製又は鐵製の器具を以て切斷することゝなつた、アブラハム及びヨシュアの時代までは石の刀を以て切斷してゐたのである。

上記の如く包皮切斷の風習は上古時代より埃及·猶太人間に行はれ

又回々教徒にも傳へられたが、又たそれ以外にボリネシア・ニューギネア及び印度の一部の蠻族に於ても夙に行はれてゐる、而て猶太人に於ては幼兒時代に之を行ふのであるが、其他の民族にては多くは十二歳より十六歳に至る迄の思春期時代に行はれ、之を行ひたる少年は始めて一人前の男となり、武具を携へ或は戰場に出づる資格を得るのである、而て包皮切斷を行ふ際には宗教的儀式及び舞踏の之に伴ひ、場合によつてはこれが六ヶ月間も續くことがある。

包皮切斷の原因に就ては種々の說明があつて未だ確固たる定說が無い或は他の種族より識別し得べき民族的徵候として之を行ふと云ひ、或は包皮の存する時は恥脂が堆積して分解し易くそのために炎症を發起し易き虞があるから之を切除するのであると云ひ或は包皮を除去すれば龜頭の知覺が鈍となるが爲め、性交の時間を延長して女子に多くの快感を與へるに由り之を行ふと云ひ或は人身犧

牲の遺習として包皮を切斷し之を神に捧げるのであると云ふが如きいろ〳〵の說明がある。

私は以上に於て包皮切斷の風習に關する大略を述べたが、愈々之れより本論に入り、我國民に於ける龜頭裸出の民族的風習に就き其の起源に關する卑見を述べてみやう。

抑々今日に於ても南洋諸島に於ける土人間には殆ど共通的の風習として貴賤貧富を通じ割禮卽ち包皮切斷の儀式が行はれてゐる、それは獨り回々敎徒たる土人ばかりで無く、同敎徒たらざる『ダイアク』『パプア』『ニアス』等の蠻族を始め『メラネシア』『ポリネシア』『ミクロネシア』等の蠻人間に於ても行はれてゐる、而て此の風習の起源に就てゲルランドの說きし處に依れば『ネリネシア』の蠻族は陰莖の龜頭を以て生命の力を賦與する神聖の部分なりと信じ、之を掩蔽せざるが爲に包皮を切除するのである、果してそれが事實で

あるか否かは分らぬが、南洋諸島の土人間に於て此の風習の今猶ほ行はれてゐること及び前述の如く石製の刀を以て包皮を切斷せし史實あるに徵すれば、其の起源は非常に舊るいもので石器時代にありしことを知るべく、而て獨逸有名の人類學者シエーテンザックの說きしが如く原始人類の搖籃地を以て南洋のアウストラリヤなりとせば、包皮切斷の風習は或は南洋土人より起つたものでは無からう歟、而てそれが亞弗利加に迄も傳つたのでは無からう歟、蓋し地質學上明かなるが如く『ブリオッエーン』時代に於て南洋島と亞細亞大陸との連絡があつたとすれば、此時代に當りて南洋の原始人類が亞細亞大陸に出で、更に亞弗利加にも進み入つたかも知れない、これは固より想像であるにしても、包皮切斷の風習は恐くは原始人類の故鄕たる南洋島より起りてそれが遠く亞弗利加にまで傳り、それより更に猶太人及び回々敎徒に傳つたのではあるまいかと思はれ

るのである。

我が日本島に於ける先住民族で九州及び其の附近の諸地に棲住せし種族、所謂『倭人』なる者の祖先の多數が南洋より移入せし土蠻なりしことは一點の疑ひも無い、殊に南九州に住みたる隼人族が其の風俗に於て、南洋の土蠻『ボルネヲ』族に酷似せしことは、其の祖先の南洋土人なることを明示するもので、卽ち黥面文身の風習ありしことや、其の用ゐたる楯に頭髮を附し赤白土を以て採色を施せしことや、犢鼻褌をあてしことや、舞踏を好みし等、いづれも『ボルネオ』の風俗に酷似してゐる、又た南洋諸島の土蠻には生殖器崇拜の習俗が夙に行はれたもので、和蘭の學者ニューウエンフイスの著者『ボルネオ旅行記』に依るも『ボルネオ』土人が陰莖の形を大きく作製して惡魔を驅逐するために立てゝ置くが如き風習がある、我國に於ても『古語拾遺』に男莖は蝗害を防ぐ魔力ありとして『宜以

牛宍置溝口、作男莖形以加之』と見え、生殖器崇拜の習俗の夙に上古時代にありしことを明示してゐるが、これ亦た其の一部は南洋より移入したるものであらう。

我が日本人の血管內に南洋土蠻たる印度ネジアン種族の血液が多く流れてゐることは人類學上既に明白なる處で、日本人中顏面の短く鼻梁の低く、口大にして唇厚く、顴骨突出し鬚髯に乏しき者は則ち此の種族の血液の濃厚なるもので、九州中國より東海に亘り、主として太平洋の沿岸に多く住んでゐる、此の如き民族は前記の隼人種族と其の祖先を同ふするもので、南洋の土蠻の後裔たる以上は、其の始めて日本島に移入せし有史以前の時代に於ては其の母國の風俗を守りて包皮切斷や生殖器崇拜を行つてゐたであらう、然るに智力武力共に優秀なる天孫民族の東北亞細亞大陸より日本島に渡來して是等の先住民族の征服せられ、或は同化せられてからは、包皮切斷の

風習もいつしか廢絕に歸し、唯だ其の遺風として少年時代より機械的に包皮を下方に牽退して龜頭を裸出するに留まるに至つたのであらう、而て此の慣習が遂に一般日本人に普及して、包莖を恥ぢ或は之を嫌ふやうな第二の慣習を生むに至つたのではあるまい歟。

日本人が犢鼻褌をしめる習俗も慥かに南洋傳來である、南洋土人の褌は長さ四尺幅一尺位で、芭蕉の纖維或は樹皮をなめして造り、其の形式に於て日本人の褌と少しも違はぬ、其の締め方も同じである、唯だ前後の兩端を長く垂れ下げて置く相違のあるに過ぎない、鳥居龍藏氏の說に依れば馬來半島よりフイリッピン諸島に至る迄、褌が廣く行はれてゐる、韓國には犢鼻褌を用ふること無く、支那にては犢鼻と稱する者あるも日本のとは全く異つてゐる、而て國史上、隼人の祖先たる火闌降命が犢鼻をつけたと云ふ傳說に徵しても、犢鼻褌が南洋の風俗であつて、其の始めは南洋土蠻の後裔たる隼人族の締めて

ゐたのが漸次一般の日本人にも普及するに至つたことが明かである、されば日本人の陰莖龜頭が裸出し又た犢鼻褌をしめる陰部に關する兩習俗は共に南洋に淵源せるものと認むべきである。

（へ） 男女の自由交會—歌垣

我國の上古時代には『歌垣』といつて男女自由交會の風が盛んに行はれた、これは『常陸風土記』にあるが如く、諸國の男女が春は花の開く時、秋は紅葉の節相集いて游戯し歌を唱和することで、此際男子の方から吾が意中の女子を呼びかけて名乘りをなし婚姻の約を結ぶのである『萬葉集』には此の歌垣を詠んだ長歌がある。

鷲の住む筑波の山の、もはつきの其の津の上に、誘ひて少女少男の徃きつどひ、かゞふかゞひに、人づまに、我も交らん、我つまに、人も事問へ、此山をうしはく神の初めよりいさめぬわざぞ

今日のみは、めぐしもな見そ言も咎むな

歌垣は都會にては市の中、村里にては山上にて行つたものである、『攝津風土記』には『歌垣山』といふ山があつて、男女此の山に登り歌垣をなしたとある、市の中では大和の海石榴市などで、武烈天皇は此の市で物部の影媛と會合せられたことがあり、又た『萬葉集』にも『つば市の八十のちまたに立ち云々』とある『萬葉古義』に『古は專ら市街に集ひてせしことゝ思はれて、大和物語に、中頃はよき人々市に出できてなん色好むわざをしけるとある』、歌垣の類なるべく拾遺集にも『すぐろくの市場に立てる人づまの逢はでやみなんものにやはあらぬ』と記してゐる。

然るに此の如き風習は南方系の民族に於ても認めらるゝ處で、『簷曝雜記』に依れば、南方支那に於ても歌垣の如き男女自由交會の風があつた、曰く『粤西土民、及滇黔苗猓(中略)惟男女之事不甚有別、毎

春月趁墟唱歌、男女各坐一邊、其歌皆男女相悅之詞、其不合者亦有歌拒之、若兩相悅則歌畢、輙携手就酒棚、並而飮』とある、仍つて思ふに、我國上古時代に行はれし歌垣も亦た南方系民族より傳來せし風習の一であらう。

(ト) 平安朝時代の喰人鬼

平安朝時代の物語や隨筆書の中には鬼が人を喰つたといふ記事が散見する、今其の二三を擧ぐれば『伊勢物語』に『行く先き遠く夜も更けにければ、鬼ある所とも知らで、神さへいといみじう鳴り、雨もいたう降りければ、あばらなる倉に女をば、奥に押し入れて、男は弓胡を負ひて戸口に居り、はや夜もあけなんと思ひつゝゐたりけるに、鬼早や女を喰ひてけり云々』とあり、又た『宇治拾遺物語』に『憎くき男の言ひ草かな、とて三度上ざまへ上けあげしげ、落つる所を口をあ

きて喰ひたりけり、なべての人ほどなる男と見るほどに、夥しく大きくなつて、この男を一口に喰ひけり』とあり、又た『今昔物語』にも『かくて三日程過ぎて、女、此の子を抱きて晝寢けるを、驅つく〳〵見てゐたうま氣、たゞ一口といひしを、ほのかに聞きて、さては鬼にこそ程なく喰ひ殺さるべし』といひ又た『戸を切り開き、火をとぼし見るに、かの妻少しも疵なく死したるを、棹にうちかけて置きけり、皮と骨とばかり殘りて、肉は少しも無かりけり、鬼の吸ひ殺したるなめりと人は云へり』とある。

降つて鎌倉室町時代の世につくれる謠曲の中にも、屢々鬼出でゝ人を喰つたといふ事が書かれてある、これは素より昔噺古歌によりて作つたもので、羅城門、大江山、遠くは陸奥の安達ヶ原、越後の戸隱山等は喰人鬼の住む處となつてゐた、この中にも『安達ヶ原』の謠曲は如何にも凄慘を極めたもので『不思義や、主の閨の中を物の隙より

よく見れば膿血忽ち融滌し、臭穢は滿ちて膨脹し、膚膩悉く爛壞せり人の死骸は數知れず、軒と等しく積み置きたり、いかさま、これは音に聞く、安達ヶ原の黑塚にこもれる鬼の住みかなり、恐ろしや、かゝる憂き目をみちのくの、安達ヶ原の黑塚に鬼こもれりと詠じけん、歌の心もかくやらん云々』とある、而て此の安達ヶ原を始めとし大江山、戶隱山等の謠曲が皆平安朝時代に於ける鬼の傳說に基いた者であることは今更絮說する迄も無い。

されば茲に於てか起る疑問は、平安朝時代に於て人肉を喰したといふ鬼なる者の本態である、當時の人々が鬼と呼びたるは、其の形容醜惡獰猛にして如何にも恐ろしく、普通の人々の眼には妖怪鬼魔のやうに見ゆた者の謂ひであらう、而て此の樣な者が王化未だ普及せざる陸奥の安達原越後の戶隱山等に棲みしのみならず、文明の中心たる皇都に近き羅城門、大江山にも居り、往々都あたりにも襲ひ來りて

人を殺し其の肉を食つたといふ平安時代の傳說が果して事實なりとせば、其の所謂鬼なる者の本態は一體何ぞあらう歟、私共の考ふる處では太古より我國に住んでゐた土蠻の類であつて、それが平安朝時代に至りても尙ほ幾分か殘存して深山、曠野に隱れ、折り〳〵都に近き場所にあらはれて人を殺し肉を食つたが爲め、當時之を恐れて鬼と呼んだのであらう、彼等蠻族が其の容貌の晉に醜恠なるのみならず、人を取り殺して其の血を吸ひ其の肉を味ふのを見聞しては、當時人心の尙ほ幼稚なりしことゝて之に鬼なる名稱を與へたのは蓋し當然である。

然らば此の鬼と呼ばれた喰人種族は一體何者かといふに、私は石器時代の頃、我國の內地に廣く蔓布してゐた先住民族であると信ずる蓋し彼等の遺蹟なる貝塚の中に、摧折せられたる人骨の往々發見せらるゝ事實は、慥かに彼等の喰人の風習を有せしことを吾人に語る

ものである、彼等の遺蹟たる貝塚とは、當時其の食したる軟體動物の貝殼の堆積であるが、併し其中には野獸の骨片、魚類の遺骨等の混在をも認める、而て吾國に於て始めて石器時代に於ける遺物遺蹟を研究したのは、米國の學者エドワード・モールスであつて、吾帝國大學の講師として聘せらるゝや、直ちに貝塚の研究に從事し、明治十一年始めて武藏國荏原郡大森村に貝塚を發見し、其の中に野獸の骨の外に往々人骨のあるのをも看出した、之に關する記事は明治十二年發行の『理科會粹』に掲載されてあるが、今こゝに其の一節を折出すれば『猪鹿骨の支離散亂せる中に、々人骨のあるを認め、其一つの倫序をなせるもの無く、恰も世界各所の介墟に於ける食人の跡と正に一轍なるを知れり、即ち、其の骨片は往々他の猪鹿の骨と共に、其の當時骨髓を收め、或は鍋に投ぜんがために摧折せられたる痕を留めて人爲の跡斑々掩ふべからず、殊に此等の骨は筋肉の剝脱し難き處に於

て削痕を留むること最も深く且つ摧殘の甚しきを見る』とある、されば此の記事に徵するに、我國先住の民族間に喰人の風ありしことは明かである、又た現今北海道の偏隅に住める『アイヌ』の祖先が喰人種なりしことは、バチエラーの明治三十四年に刊行せし『アイヌ人及び其の說話』中にも記する處で、其中に『アイヌの祖先は人肉を食する人種なりし故、己の親戚と雖、之を殺し、生にて其の肉を食したり、然るに神なるアイヌイナ、天より降りて捕魚鎗、弓、鍋等を製作することを敎へ、且つ魚類肉食は食前必ず料理して食ふべきことを敎へたり、其の人々互ひに相殺して其の肉を食ふは誠に惡るしとて大に戒めたり、又たアイヌイナはアイヌに漁獵をも與へたり、故にアイヌは其後人と互ひに相殺し人肉を食せざるに至れり』とある、又た人類學者の泰斗たりし坪井正五郞氏の『東亞の光』第六卷第二號の紙上に公にせられし一論文に於て『方々にある貝殼の層の中

から、鹿や猪の骨と同じに人骨の割つたのが出る、これが若し葬むつたのなら、全體がある譯ですが、さうで無い、手足の骨がバラ〴〵になつてゐる……、兎に角、野蠻未開の地を調べてみると、現存の人間の中にも、人肉を食ふといふ事のあるのを見れば、日本に古く住んでゐた人間の中にも或は人肉を食ふ風があつたであらうと推測することが出來る』と述べてゐる。

是に由りて之を見れば、我國の先住民族たる『アイヌ』に喰人の風のあつたことは明瞭である、又た同じく穴居の蠻族たる土蜘蛛族の如きも、之を南洋系のものとすれば、喰人の風のあつたかも知れないされば平安朝時代の物語中に散見する喰人鬼は、當時尚ほ山野に隱れたる先住民族の子孫と看做すべきものである、久米邦武氏も『史海』第三十二卷に於て『そのかみ、大和の京にてありし時は、丹波丹後の山奥には、土蜘蛛、佐伯の類殘りて、山城の原にも出で人を喰ひた

りし故に平安の京となりし後も、人々皆斯くは恐れたるなり、世やゝ下りて堀川鳥羽の院の朝に、藤原隆國の宇治物語、今昔物語、宇治拾遺物語にも、鬼の人を喰ひたる話は幾條もあり』と述べられたが、是に由りても喰人の風ありし先住民族の尙ほ殘存せるものが當時の所謂鬼たりしことが益々明かである。

（チ） 鬚髯を蓄ふるの風俗

上古時代より平安朝時代の初までは男子は自然のまゝに鬚髯を生やしてゐたもので、殊に武勇の士として雄々しく見せるには是非共鬚髯を蓄へるのを必要とした、然るに平安朝時代に至りて質朴剛健の氣の衰へ優美懦弱の俗を生じてより男子でありながら女子の态態を傚ひて鬚髯を剃去するに至つたのであらう、但しこれは主として公卿の間に行はれたもので鬚髯の外に眉毛をも剃ることになつ

た『梅窓日記』に『古代は凡て鬚を除かざることの樣に云へど、源氏物語に御鬚なども取り繕ひ玉はねば、茂りて親の喪よりもげにやつれ玉へりとあるを見れば、此頃は次に髭を剃り玉ひしにや』とあり、又た荻生徂徠の『南留別志』には『男の鬚を剃ることは男風盛んになりて眉をつくり、薄化粧せし頃よりのことなるべし』とある源氏物語の出でし時は人の知る如く平安朝時代であり、又た男色の盛んとなりしも此の時代からのことである故、此等の事實の上より考ふれば男子の鬚髯を剃去せしは平安朝以來のことであらう。

さり乍ら武士社會にては近世時代に至る迄も鬚髯を蓄はへ、若し男子にして鬚なき時は非常に之を卑んだものであつた、此の如き風習は既に奈良朝時代にもあつて『萬葉集』に『かつまたの、池はわれしか蓮なし、しか言ふ君の髭なきか如』といふ歌があるが、髭の無い男は一種の不具者か或は女の如き柔弱なものゝ如くに思はれた、降

て江戸時代の初期に至る迄も、勇武を重んずる武士社會は鬚髯を尙び『慶長見聞集』にも『天正の頃小田原にて岩崎嘉左衛門、今井六郎兵衛といふもの戯言をいひあがり爭ふ、嘉左衛門が髭なし六郎兵衛あの髭なしと悪口しければ、卽時に刺しちがへて死したり、さる程に男たる人の髭なしと言はるゝは臆病といはるゝ程の恥辱に思ひたまへり、故に髭なき男は、あはれ髭生ゆるものならば、身をしろかへて毛髭を生へさせばやと願ひたる云々』と見え、又た『還魂紙料』にも『昔の男は髭を好み、其の美しからんことを望むが故に常に毛抜きを放れず、旣に客を招請する時、煙草盆に毛抜きを添へて出だせしとぞ、されば髭なきものは墨にて髭をつくりし遺風近年(文化頃)まで町奴といふ者にありて能く人の知る處なり』とある、此等の記事に徵しても、江戸時代の初期までは尙ほ武士社會に鬚髯を重んぜし風の行はれたことが明かである。

此の如く我國にては上古時代より近世時代に至る迄、男子就中武士階級に於て鬚髯を蓄はへ、之れなきを一種の耻のやうに感じたのは私の見る處を以てするに、是れ亦た日本民族の祖先の一たる『アイヌ』の遺風であらう、蓋し多鬚多髯なる『アイヌ』が其の種族的特性を重じて鬚髯を愛重せしは顯著なる事實であつて『續々群書類從』中に收載せる『蝦夷島記』にも『科人をば死罪に行ふことは之れ無く、過科を取り申候、過科贖ひならず候へば、髭を拔き罪を免れ申候、髭を拔かれ候へば、蝦夷の交り相成り不申候、死罪同樣に存じ候由』とある、而て上古時代より朝廷守護の親兵となり、又た權門の從者となつたものは『アイヌ』(蝦夷)及び隼人であつて、宮闕護衛の任に當りし蝦夷は佐伯部と稱せられ、武門の棟領たる大伴氏の一族佐伯氏の統率の下に在つたものである、而て平安朝時代以降、王政の變徽に乘じて東國に崛起せし武士には蝦夷の血液を混せるもの多く

其中にも奥羽の雄鎭たりし藤原秀衡や安倍貞任等の如きは蝦夷系の武士中、最も世に顯はれた者である、されば京師の公卿は、東國の武士を稱して『東夷』(あづまゑびす)といへる蔑稱を附した、是に由て之を見ても、古來武士社會が鬚髯を重んぜし由來は自然明瞭である。蝦夷の血液を禀けたる武士が、其の祖先よりの遺傳的因習をも受けて簡粗素朴の生活を營み勇壯剛健の士風を尙び鬚髯の黑くして漆の如くなるを喜んだのも決して偶然でなく、這般の風習は江戸の初葉までは依然として持續し、町奴下賤の輩に至る迄も髭を蓄はへ或は作り髭を書いて勇武を裝ふてゐた、然るに元祿時代の頃から其の反動が起つてきて武士社會にも豪奢懦弱の風を生じ、今まで人に誇りし鬚髯をも殘り無く剃りて女子の風を粧ひ、果ては唇に紅し粉を塗るものを出だすやうになつた、元祿の頃までは大地に踞る折助又たは鎗持挾箱持の如き匹夫下郞でさへ、鬚髯を生やしてゐたのであ

るが、此の時代以降は蓄髭の風殆ど消失して明治維新の頃にまで及んだのである。

明治維新後我が國民の再び鬚髯を蓄ふる者の多くなつてきたのは散髮に於けるが如く、歐洲の風俗を眞似たが爲めで、其の證據には明治七年世に出でし『門答』といふ小冊子に『髭でも生やし、やたらに西洋人を眞似たがり』といへる川柳を載せ、又た同年發行の『繁昌誌』に開化の事物を列擧せし中に『生髯新古』といふのがあるを見ても分かる。

(リ) 眼尻の朱紅と紅隈

操人形や舊劇狂言には奸將惡卒に限りて其の眼尻に朱紅を施し或は紅の隈取りをして蠻勇を表徵せしめてゐる、私は之を以て日本民族の祖先の一たる隼人族卽ち印度ネジアン族系の遺風遺俗を傳へ

たるものと信ずる。

抑々上古時代の軍兵たる久米部、即ち隼人族と其の系統を一にせる異種族に、黥面の風ありしことは『古事記』に『大久米命、次天皇之命、詔其伊須氣余理比賣之時、見其大久米命黥利目而思奇云々』とあるを見ても明かである、黥利目(さけるとめ)とは蓋し目眦を裂きて之に入墨せるの謂ひである、本居宣長の『古事記傳』には『黥は唯だ借字にてさけるは裂けるなり、そは自然に裂けてあるを云ふ他の之を裂きたるに非ず』と註解してあるが、併し此の如き解釋は固より不當であつて、既に黥といふ文字の特に使用せられてある以上は、矢張り其の文字通り黥面のことゝ解しなければならぬ、古語にては黥を『めさく』といふ、卽ち眼眦を裂くの義であつて、眼尻に黥を施し眼の外觀を鋭くするのである、久米部の(久米)といふ語原が久流目(くるめ)より出で、『久流目』とは眼目のくる〳〵として眼先きの鋭いこ

とを云つたのであらう、而て之を我が古史に於ける記事に徵しても黥は之を面部に施したもので、殊に海人部の俗なる阿曇(あづみ)が黥を稱して阿曇の目(あづみのめ)と云つたのは、眼邊に黥を施すの俗ありしことを證するものと謂はねばならぬ、而て此の阿曇の族も久米部と同じく南方系の異民族である。

此の如く上古より中古時代の初期にかけて勇悍獰猛なる隼人出身の軍兵武士は一般に眼尻に黥を施してゐたものであるから、平安朝時代頃より起つた傀儡師は猛勇奸惡なる人物を示す人形には特に其の眼尻に朱紅を施して蠻勇の風を象徵せしめたものであらう、而て此の風が近世にまで傳はり遂に演劇にも及んで紅の隈取の如き風も起つたのではあるまい歟。

(又) 涅齒

婦人が其の歯に鐵漿をつけて黒く染める風習、卽ち涅歯の風習は近年に至て大に衰ふるやうになつたが、古代に於ては啻に婦人のみならず、男子間にも行はれたものである。

涅歯がいつ頃から起つたか否かは明白で無いが、平安朝時代の隨筆本物語本から涅歯の風の記載せられてあるのを見ると、此時代頃より世に大に行はるゝやうになつたらしい、淸少納言の『枕の草紙』には歯ぐろめの能くつきたる』といへるが如き記事あり『紫式部日記』には『歯ぐろめつけなど、果敢なき繕ひすとて云々』と見ゆ『源氏物語』に『歯黒めもまだしかりけるをひき繕はせ玉へれば云々』とあり『空穗物語』に『御鏡たゝう紙黒ぐろめより始りて』と見ゆ『榮花物語』に『歯ぐろめ黒らかにつけて紅赤う』とあるなどに徵すれば始めは專ら女性間に涅歯の風の行はれたことが分かる、然るに、平安朝時代の末葉に近き鳥羽天皇の頃から、男子にも涅

齒をなすが如き風が起つてきた、もとは公卿が始まりで『海人藻芥』に『鳥羽院の御代以前は男の眉の毛を拔き、髭をはさみ、鐵漿をつくること一切無之云々』とある、然るに武家時代に入りては武士も齒を染めるやうになつた、それは『平家物語』『源平盛衰記』『太平記』を見ても武士涅齒の風のありしことは明かであり、降つて足利時代の末葉に至る迄も此の風が行はれた、『武器考證』に『小田原北條家に限らず、古代京都の武士は鐵漿をつけたり、他國の侍はかねつけることと無かりしを小田原の侍はかねつけしことをいへるなり云々』とある。

涅齒の風が南洋傳來のものであることは前既に述べて置いたが、江戸時代に於ける考證家の中にも外國より傳來せし風習なることを述べたものがある、例へば喜多村信節の『嬉游笑覽』に『黑齒其始め定かならず、和名抄に文選註を引いて、黑齒國在東海中、故曰黑齒、俗

云波久路女云々』と記し、又た『和事始正語』にも『交趾國人男女齒を黑くす、ギンマと云ふ草を噛みて齒黑くなる、客來れば先づギンマを供すと華夷通商考に見えたり、黑齒國とは交趾のことなるべし』とある。

古來馬來半島の土人間に檳榔子を噛むの風あることは周知の事實で土人は檳榔子を切つて小片となし、それを口に入れて噛みては味ひ、味ひてはそれを口から吐き出す風習がある、之がため彼等の口唇は赤く齒は黑い、我國の民族には前既に論せしが如く、南方系の種族も尠くないから、最初我國に移住せし當時は母國の風を守りて檳榔子を噛んだ者もあつたであらうが、次第に其の不足缺乏を告げてきたが爲め人工的に黑齒の法を講ずるやうになり、鐵漿をつけて黑染するが如き慣習を生ずるに至つたのであらう。

（ル）伊勢人

江戸時代に於て卑客の商人といへば『伊勢屋』の名を以て代表せられたもので、尚時代の狂句や川柳等に徴しても明かなるが如く、商技に敏にして且つ卑客の甚だしきもの丶代表的名詞としては伊勢屋を擧げ、之を痛快に罵倒してある、然らば伊勢屋とは如何なるものかといふに、それは伊勢國より出でた商人で、江戸開府の當時、江戸に集り來り、軒を連ねて店舗を開いたものである、伊勢の人間が元來商利に拔け眼なく資財を作るに手段を選ばざりしことは決して江戸時代に始まつたことで無く、遠く平安朝時代から人に知られてゐたことで『今昔物語』には伊勢人を罵りて『伊勢國は父母の物を奪ひ取り、貴き賤きを簡はず、互ひに隙を量りて弱き者の持ちたる者をも憚らず奪ひ取りて己が貯とする處なり』といひ、伊勢人の貪慾狡

滑なることを攻撃してあり、又た『夫木集』には鴨長明の和歌なる『伊勢人はひが事しけり津島より甲斐川行けば和泉野の原』や、又た西行の和歌なる『いせ人はひが事しけり笹栗のさゝにはあらで柴にこそあれ』などを載せてある程で、伊勢人の自利主義なることは平安朝時代よりも能く世人に知られてゐた、此の如き國人であるから、江戸の開府せらるゝや、其の繁昌を耳にして遙かに江戸に上り商店を開いて資財を作るに餘念なく『伊勢屋』といへば貪慾卑吝の代名詞とまで思はるゝに至つたのである。

併し伊勢人が商人として成效したのは、元來冒險的勇氣に富める海國人であつたからで、其の小舟に乘じて大海を横りし大膽進取の氣質は夙に翟馬樂中にも『伊勢人はあやしき者をや、何故といへば、小舟に乘りてや、荒き海を漕ぐや、荒き海を漕ぐや』とまで謠つてゐる程である、されば此くの如く元來冒險的なりし伊勢人が商人として

成功し、伊勢屋として發展したのも決して偶然でない、彼等の卑吝貪慾なりしは其の商人たるの性質として射利致富の法に手段を選ばざりしに由るので、彼等の成効の一面は其の大膽進取の氣質にも基づくのである、伊勢人が片々たる小舟に乘じて怒濤狂瀾の大海を航するも平氣なりしが如き航海的國民たりしことは、其の祖先の何たるかを吾人に暗示するものである、思ふに彼等の祖先は倭人に系統を引く處の『海人』であつたであらう、海人は私の既に論じたるが如く印度支那族と認むべきものである、航海と漁業とに於て印度支那族たる呉越人種が一種の特長を有せしことは史上明かなる事實である、航海と漁業とに長じたる此種の民族が其の冒險進取の氣象より商人に轉ずることは固より自然の數であつて、彼の支那人が商人として世界を股にかけ、利殖致富の術に於て少しの拔け眼もなく大膽に敏捷に活動してゐる者の多くは主に南方支那出身のもので

ある、而て南方支那は古代に於て印度支那族たる呉越人種の棲住地であつたことを思へば我國に於ける伊勢人が同じく印度支那族の後裔として航海の業に長じ、遂に商人として世に發展するに至りしも亦た自然の數であると謂はねばならぬ。

附錄

日本巨人考

（一）

日本人の身體が一般に短矮であつて、同一の黃色人種たる韓人支那人よりも其の身長の短いことは周知の事實である、ラインは日本人の平均身長を一五〇仙迷、ウエルニッヒは一五四仙迷と云つたが、併しこれは過小の測定であつて、ベルッの平均身長一五八乃至一五九(壯年男子)三輪德寬の一五九、三仙迷といつたのが先づ實際に適してゐる。

抑々世界の人種を其の身長より區別すれば之を三種に分つことが

出來る、即ち一六五乃至一七〇仙迷以上の身長のものを『大人』一五五乃至一六四、九仙迷のものを『中人』これより以下のものを『小人』と稱する、これは歐洲に於ける統計學者の一區別であるが、若し此の區別に據る時は平均一五九仙迷の日本人は『中人』の下級部類に編入せねばならぬ。

此の如く日本人の身長の短小であるのは、私の見る處を以てするに有史以前の時代に於て東北亞細亞大陸より吾國に渡來せし天孫民族と南洋方面から入り來りし廣義に於ての馬來種族との雜婚の結果であらう、蓋し我が日本人の幹部たる天孫民族即ち大和民族がツングース族即ち北蒙古族に屬することは既に本文に於て論じた通りであつて、吾人の祖先は實に遼、金、元、清の民族と同系の種族より出で漢人の所謂匈奴鮮卑、契冊、扶餘靺鞨等の英雄豪傑の血液は吾人の血管內にも流れてゐるのである、然るに吾が日本人が同じ血液な

る今日の蒙古滿州の民族よりも其の身長の短小であるのは、馬來種族の血液の混和せる結果であらう『アイヌ』は其の體格の點から見れば、今日の日本人とは其の體長體質を異にしてゐる。馬來人種の身長の一般に低いことは周知の事實であつて、ルックスの述べし如く世界の人種中、短身民族の一は實に馬來人種とラップ人種である而て大和民族と混血融合せし馬來種族は之を精確なる人種學上より論ずると印度支那族印度ネジアン族であつて、今日に於ても南方亞細亞、南洋諸島に棲住してゐる。

本文に論せし如く、日本人は異種異性の人種より成れる混合民族であつて、一定の人種的形貌を具へて居らぬが、併し其の身體の一般に短矮なる點だけは今日の日本人に共通せる普遍的徵候といつて可い、然るに日本人の中にも古來より往々身體の異常に長大なる者が現はれ、その中には北歐の人種をも遙かに凌駕する程の大男もあつ

た、這般の事實に就て私の聊か調査した處を綜合して叙説するのが此の『日本巨人考』である。

(二)

吾國の古史に於て最初に記せられたる巨人は猿田彦命である『日本紀』に曰く『有二一神一居天八達之衢、其鼻長七咫、背長七尺餘』と、其次は景行天皇で『御身一丈二寸、御脛四尺一寸(『古事記』)とあり、其次は日本武尊の身長一丈(『日本紀』)成務天皇の一丈(『水鏡』)仲哀天皇の十尺(『古事記』)反正天皇の九尺二寸(『古事記』)である。

併し上古時代に用ひられたる尺度が近代の尺度と異つて遙かに短かゝつたことは、夙に本居宣長の『古事記傳』中に注意せし處である、其の一節に曰く『丈と云ふのは、もと杖を以て物の長さを度りしより出たる名なり、萬葉集巻十三に杖不足八尺乃嘆と詠めるも、一丈

に足らぬ八尺といひつゝげなり、さて茲にいへる丈尺は今の御制の尺よりは短かりけんと師は云はれきさもあらんか、今詳に知り難し』とある、されど小中村清矩の『陽春廬雜考』に記する處に依れば、上古の尺度は周尺であつた、卽ち周尺の一尺は曲尺の七寸六分に當るから、身長一丈は七尺六寸となる譯である、又た屋代弘賢の『古今要覽考』には『應神の御世ならば周の長さ四分七厘のもの、雄略の御世ならば宋氏尺なるべし』と記してある、要するに上古時代の尺度が近世の尺度に比して遙かに短かゝつたことは明かである、而て今の曲尺と同じき尺度の初めて設けられたのは孝德天皇の御代で、其後、文武天皇の御宇に律令の定められし時、大尺小尺の二種を分ち、孝德の世の尺度を大尺として田穀銀銅等にのみ用ひ、其他、常用尺とするものは小尺を用ひられた、其後、元明天皇の和銅六年に至り、復た舊の如く大尺を常用卽ち今の曲尺を常用とせられ、遂に今に至つたの

である（『古今要覽考』參照）
上記の如く太古時代の尺度が周尺であつたとすれば『古事記』『日本紀』『水鏡』等に身長一丈二寸、一丈等と記載せられしものは、其實曲尺にて七尺七寸、七尺六寸である、されど奈良朝前後時代より以來は曲尺を常用するやうになつたのであるから、巨人の身長の曲尺度なることは言ふ迄も無い、而て古史上に於て巨人と看做された最小限の身長は私の調べた處では五尺八寸である、それは『續日本後記』に阪上田村麿の身長五尺八寸と記してあるのが、古史上に於ける巨人身長の最小限であつて、他の巨人は悉く六尺以上であるからである、但し平安朝時代の頃に當り、所謂『長人』として特に認められてゐたのは、六尺三寸の身長を有するものであつたらしい『古今要覽考』に『長人は六尺三寸を云へるにや、清和天皇貞觀八年、相摸、武藏上總、下總、常陸等の國に長人を選集すべき由下知せられし時、此の尺

寸を記るされたればなり』と記して『三代實錄』中の記事を引用してある。

（三）

中古時代以降、國史及び野乘のうちに見ゆる巨人の中、身長八尺以上のものを擧げてみると、

（一）源　義　包

『難太平記』に曰く、抑々義包は丈八尺餘にて力人に勝れ玉ひしなり、まことに爲朝の子と云々

（二）河　野　通　清

『河野系圖』に曰く、河野通清父親清無子、祈三島神、生通清、及長、身長八尺

（三）姓　名　未　詳

『太平記』の山門改の條下に曰く、八庄司が中の大力よと覺えて
　長八尺許りなる男の……。

先づこれ位なものである、江戸時代に於ける有名の力士明石志賀之助の身長に就て『勇力關取鑑』には八尺三寸とあるが、杜撰にして信ずるに足らずといふ說が多いから茲には之を算入しない。
身長七尺以上のものは遙かに多く、中古時代より近世時代までのものを擧げてみると、

（一）源　爲　朝

『保元物語』に曰く、爲朝は七尺ばかりなる男の目角二つに切れ
……

（二）西塔の惡僧某

『平家物語』に曰く、西塔のぢうりよ、かいしやう法師の阿奢梨ゆふけいといふ惡僧あり、丈七尺許りありけるが……

（三）僧　文　覺

『源平盛衰記』に曰く、文覺、勸進帳をば左の手に取渡し右の手には懷より刀を拔出で（中略）長七尺ばかりなる法師の大刀にて……

……。

（四）左中太常澄

『東鑑』に曰く、左中太常澄狹六郎、其の長七尺許。

（五）長　茂

『東鑑』に曰く、長茂參入、長七尺男也。

（六）風　摩

『北條五代記』に曰く、風摩は二百人の中にありて隱れなき大男長七尺二寸。

（七）佐　原　十　郎

『佐原系圖』に曰く、義連稱佐原十郎、身長七尺五寸

（八）頓宮又次郎

（九）同　孫　三　郎

（十）田　中　盛　兼

（十一）田　中　盛　泰

『太平記』に曰く、こゝに赤松の勢の中より兵四人進み出で（中路近づくに從ひて之を見れば長さ七尺許りなる男の云々、頓宮又次郎、子息孫三郎、田中藤九郎盛兼、同舍弟盛泰。

（十二）阿　間　了　願

『太平記』に曰く、法師武者の長七尺餘もあらんと覺ゆたるが、阿間了願と名乘りて云々。

（十三）秋　山　光　政

『太平記』に曰く、桃井が扇一揆の中より長七尺許りなる男の、秋山新藏人光政と……。

（十四）武田光和

『陰德太平記』に曰く、此人生長の後（中略其長七尺餘ありて……。

（十五）釋迦嶽雲右衛門

諸書に記する身長一定せず『かたひさし』には、身長七尺八寸とあり『相撲大全』には七尺一寸六分と記し『嬉游笑覽』には七尺五寸とある、恐くは身長七尺一寸といへるが眞に近かるべし。

（十六）鬼勝象之助

『相撲大全』に曰く七尺三寸

（十七）姓名未詳

『游京漫錄』中に、伊豫生れの穢多某の大男なりしことを記せる條下に『たけの長さ七尺五寸』とあり。

（十八）生付鯨太左衛門

『松屋筆記』に曰く身長七尺四寸五分の長人江戸に來れり云々

(十九) 丑　又

『松屋筆記』に曰く、丑又といへる長人江戸に來れり、身丈七尺餘

といへり。

(二十) 田所武左衛門

『細川越中守家臣筆記』に曰く、身の丈七尺三寸

女子にして七尺以上の大女は左の二人である。

(二十一) 姓　名　未　詳

『古事談』に曰く、萬壽三年四日頃、女長七尺餘、面長二尺餘、乘船寄

丹後國浦

(二十一) 大　女　よ　め

『武江年表』に曰く、堺町に近江の國出生にて、およめといへる大

女その丈七尺三寸なるを見世物とす。

（四）

六尺以上の身長を有せるものは前者よりも更に多い吾國の中古時代にても、六尺以上のものを巨人と認めたらしく、諸國に命じて朝廷に貢せしめたことは『續日本後紀』に仁明天皇の御代『承和十五年、仰七道諸國、貢身長六尺已上者』とあるを見ても分かる、古今の史乘隨筆より六尺以上のものを列擧すれば、

（一）甘南備眞人高直

『續日本後紀』に曰く、高直身長六尺二寸。

（二）春野宿禰

同書に曰く、身長六尺餘

（三）藤原濱主

同書に曰く身長六尺。

（四）橘　清　支

『文德實錄』に曰く、身長六尺二寸。

（五）藤　原　高　房

同書に曰く身長六尺。

（六）小　野　篁

同書に曰く、身長六尺二寸。

（七）安　部　安　仁

『三代實錄』に曰く、身長六尺三寸。

（八）滋　野　貞　雄

同書に曰く、身長六尺餘。

（九）橘　岑　繼

同書に曰く、身長六尺餘。

（十）紀　夏　井

同書に曰く、身長六尺三寸。

（十一）平　高　棟

同書に曰く、長六尺。

（十二）安　倍　貞　任

『陸奥話記』に曰く、其長六尺有餘腰圍七尺四寸。

（十三）景　久

『曾我物語』に曰く、丈六尺二寸。

（十四）山颪嶽右衛門

『古今相撲大會』に曰く、六尺六寸七分。

（十五）石　槌　島　之　助

同書に曰く、六尺四寸七分。

（十六）御用木魚右衛門

同書に曰く、六尺四寸五分。

（十七）大碇灘右衛門
六尺四寸三分。
（十八）西國市太左衛門
六尺四寸。
（十九）九山權右衛門
七尺三寸七分。
（二十）西國森右衛門
六尺三寸七分。
（二十一）菅谷勘四郎
六尺三寸二分。
（二十二）大矢島新左衛門
六尺三寸。
（二十三）卷尾曾津之助

六尺二寸七分

（二十四）箕島十太左衛門
六尺二寸七分。

（二十五）窟林左衛門
六尺一寸五分。

（二十六）細石嵯峨右衛門
六尺一寸五分。

（二十七）北國官太夫
六尺二寸七分。

（二十八）楯ヶ崎浪之助
六尺二寸五分。

（二十九）秋津島浪右衛門
六尺一寸八分。

（三十）杉の森長右衛門
六尺二寸五分。
（三十一）吉野川團右衛門
六尺一寸。
（三十二）波戸崎岸右衛門
六尺二寸。
（三十三）里見山丈右衛門
六尺五寸。
（三十四）鎌倉十七
六尺二寸。
（三十五）丸山仁太夫
六尺二寸。
（三十六）卯内（奥州本吉郡氣仙沼）

『古今要覧考』に曰く、六尺七分。
（三十七） 三太（同郡赤生津村）
同書に曰く六尺一寸五分。
（三十八） 某（登米郡田尻村）
六尺二寸五分。
（三十九） 喜八（江刺郡平山村）
六尺二寸五分。
（四　十） 徳六（宮城郡利府村）
六尺三寸。
（四十一） 渡津濱十島五郎八
六尺三寸。
（四十二） 大岬丈右衛門
六尺二寸五分。

（四十三）九紋龍清吉

六尺九寸三分。

（四十四）大女つた

『武江年表』に曰く六尺七寸許。

『兎園小説』に曰く、衣服は長さ六尺七寸にして裾をひくこと一二寸に過ぎず。

（四十五）谷風梶之助

六尺五分。

（四十六）小野川喜三郎

六尺一寸。

（四十七）鷲が濱

六尺三寸。

（四十八）陣幕島之助

六尺二寸五分。

（四十九） 大砲萬右衛門

六尺四寸四分。

（五　十） 太刀山峰右衛門

六尺一寸七分。

（五十一） 千　曲　川

六尺五六寸。

（五十二） 駒　ヶ　嶽

六尺五分。

（五）

以上は古今の史書隨筆、野乘等の中より抄出したものであるが、固より遺漏の尠からざることは明かであり、又た身長の測定が今日吾人

の行ふが如き科學的測定法に依つたもので無いから實際に於ては無論確實なものでないが、先づ大體に於て其の巨人たることだけは明らかである。

併し今日に於て學術上巨人と稱すべき者は、身長二百仙迷即ち六尺六寸以上のものであらねばならぬ、蓋し一般の人種を通じて普通身長の極限と認むべきは百二十五仙迷乃至百九十八仙迷であつて、二百仙迷を越ゆるものに至ては歐米人に於ても甚だ稀有である嘗てグルド米國の兵卒に就て調査せし所に依るも、二百仙迷以上の身長のものは百萬人中、僅に九十五人に過ぎなかつた、之を我國近世二百年間に於ける力士の身長を見ても、六尺六寸以上のものは僅かに七名に過ぎない(明治四十二年發行の『相撲大鑑』參照)身長の偉大を以て特徴の一とする力士に於てさへ此の如くであるから、一般の人士に於て六尺六寸以上のものゝ異常に稀有なるは當然の次第である

而て私が以上列擧せし八尺以下六尺以上の者を合計すると都合八十二人になるが、併し身長二百仙迷即ち六尺六寸以上のものを以て『巨人』と認むべき以上は前記の數よりも著るしく減少し、僅かに三十三名となる譯である。

(附言) 傳說に於ける日本の巨人

今こゝに述ぶるものは古の傳說にあらはれし巨人で、無論信を措くに足らないが、聊か參考のために附記して置くことにした。

吾國の巨人傳說中、其の最も古るいものは『常陸風土記』中の那賀郡の條下に記せる巨人である、曰く『平津驛家、西一二里有岡、名曰大櫛、上古有人、體極大其踐跡三十餘步、廣三十餘步』と、

『諸國風土記』に曰く、半田村百姓善右衛門の地に古塚ありしを、享保二三年の頃、故ありて堀り崩せしに、人の頭骨出でたり、さしわたし三

尺四寸、上齒四十五枚、下齒三十六枚、齒の長さ一寸四分。

『新著聞集』に曰く、骸骨一具あり、顏のまわり三尺七寸顏より腮まで一尺七寸、齒の長さ一寸五分云々、

『見聞奇談』に曰く、骸骨あり、頭の大さ四斗樽ほどあり、云々（『歷世女裝考』參照）

右の如き傳說は荒唐無談の空談か或は獸骨の誤認に出でたものであらう。

日本人中の短身者

日本人の中、普通型とは異つて身長の著るしく短小なるものがあると云つて決して侏儒と云ふ程では無いが、身長一四〇仙迷內外で、此樣な短身者は日本人の眼にもつき易い。

抑々日本民族の中心たる天孫種族は滿蒙の民族と同一の種族であ

るが、併し滿州人の身長は平均一六七仙迷であり、又た北部支那人の身長も略ば之と同樣であるから、日本人の平均身長一五八乃至一五九仙迷に比すれば遙かに高く、又たスマトラ、マラッカに住める馬來人種でも其の身長一六一仙迷内外である、されば日本人中の短身者は是等の種族以外の人種の血液の混合せるものと認めねばならない、今之に就て少し許り管見を述べてみやう。

先づ古書に就て之を見るに、身長の短小なる者に關する記事が尠くない、例へば『續日本紀』に『是日、勅喚大舍人穴太馬麿、與内竪橋吉雄、雙立量其身長、吉雄甚短而其頭首不及馬麿腋下』と見へ『古事談』に『行通も我樣なる小さき人は袋などに入らばやとて、袋のありけるに、つかみ入れて人々御共に參れとて云々』とあり『愚管抄』には『惟方は小男にてありけるが、直衣にくゝり揚げて、ふと參りてそゝやき申て出でにけり』と見へ『陰德太平記』には赤松滿祐の三

尺入道と稱せられしことが書いてあり、又た『臺記』にも身長三尺二寸八分の僧侶のありしことが記してあるが、此等は必ずしも病的の侏儒では無く、普通人に比して遙かに身長の短小なりし事例であつて、現今に於て四尺五六寸位の小男も稀でない。

上記の如き小男は病理的の者を除けば、短身種族の血液を禀けてゐるものと看做さねばならぬ、然らば、短身種族とは如何なるものかと云ふに、私は之を三種に區別することが出來ると思ふ、即ち、『アイヌ』苗族、及び『ネグリトー』の三種であつて、固有日本人とは其の種を異にする此等の種族の血液を混じてゐる者の中より小男が生れるのであると信ずる。

『アイヌ』は普通の日本人に比して一般に其の身長が低い、殊に今猶は石器時代の狀態にある千島『アイヌ』の短身なることは顯著の事實であつて、所謂『コロボックル』として今日の『アイヌ』間に

傳唱さるゝ矮人は蓋し千島『アイヌ』の祖先と看做すべきものであらう、今の『アイヌ』にしても未だ日本人と接觸同化せざりし太古時代に於ては矢張り千島アイヌと同様に身長の甚だ低かつたものと想はれる、それは近年陸前宮戸島の石器時代の遺蹟中より發掘せられし多數の人骨の短いのを見ても明かで、アイヌ種族の身長が太古より低かりしことは之を想像するに難くない、さればアイヌの血液を稟けてゐる者の中から小男の生まれるのは遺傳の法則上當然の現象であらねばならぬ、『アイヌ』は今日に於てこそ僅かに北海道の偏陬に棲住するに過ぎないが、先史時代の頃には日本内地に汎く住居し、其後、日本に移住せる天孫民族のために壓倒せられて次第に東北地方に退いたが、併し夙に天孫民族に歸服同化せし者も尠く無いのであるから、其の血液を混ぜる日本人中に小男の出づべきことは論を竢たざる處である。

苗族は今日に於ては支那南部に住める種族であるが、太古時代に日本に移入せし者のありしことは苗族の手に成れる銅鼓と其の系統を同うせる銅鐸が日本の各地より發掘せらるゝことに徵しても明かである、苗族の身長は短く、平均一五五仙迷で、其の極めて小なるものは一三九仙迷の者もあり、軀幹の割合に下肢が短い、而て天智天皇時代の頃より日本の各地方の土中より發掘せらるゝ銅鐸が支那南部に住める苗族の手に成る銅鼓と同系である以上は、有史以前の頃より日本內地に移住蕃殖せし苗族の數の決して尠くないことが明かであり、從つて其の血液の混合せる日本民族中より短身者の出づることの必ずしも稀ならざる所以の理を解釋し得られる。

此の他、日本に於ける短身者中には、『ネグリトー』の血液を禀けてゐる者も尠く無いやうである『ネグリトー』は目下フィリッピン群島の內部に住んでゐるが古昔に於ては馬來諸島に棲住し、皮膚黑

色で頭髮の著るしく捲縮し身長の極めて矮小なる種族である『魏志』『後漢書』に侏儒國に關する記事があるが、或はネグリトーのことかも知れない、而て此の短身蠻族の血液が日本人の血管內に流れてゐることは先づ第一に日本人中に著るしい縮れ毛の者の往々あるを見ても明かである、但し『アイヌ』の頭髮も多少捲縮してゐるが、併し未だ縮れ毛と稱する程度には至らない、されば日本人中、縮れ毛と同樣に身長の短小なる者のあるのも、其の一部分は『ネグリトー』に關係があらう、又た生れながら色の極めて黑い人の往々あるを見ても『ネグリトー』が聯想せられる。

以上概述せる處を綜合すれば、日本人中の短身者は異民族なる『アイヌ』苗族『ネグリトー』種族の血液混合に由來するもので今日に於ても隔世遺傳によつて現出する者の必ずしも稀有でないことが考へ得られる。

大正十五年八月廿五日印刷
大正十五年九月一日發行

（日本民族史奥附）

定價
特製　金貳圓五拾錢
並製　金壹圓五拾錢

發行兼著作者　大阪市住吉區北田邊町四三番地　島本政一

印刷者　大阪市西區江戸堀上通二丁目二九　長崎富二

印刷所　大阪市西區江戸堀上通二丁目二九　文成堂印刷所

發行所　大阪市住吉區北田邊大鐵電停前　東洋タイムス社